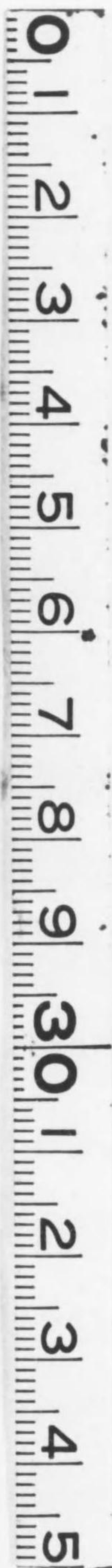


71-600-(39)



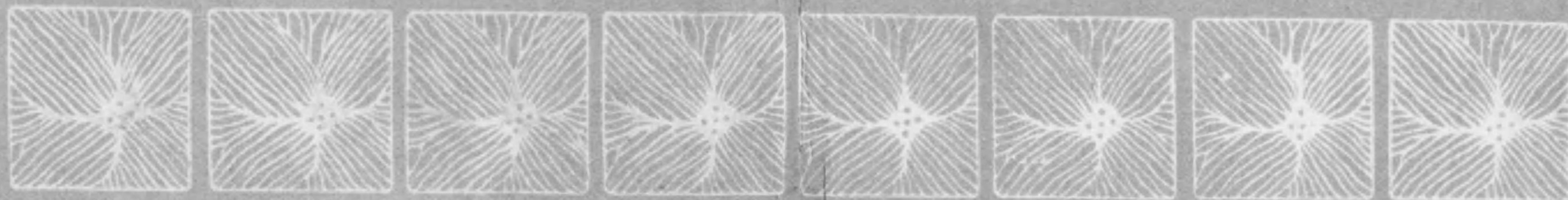
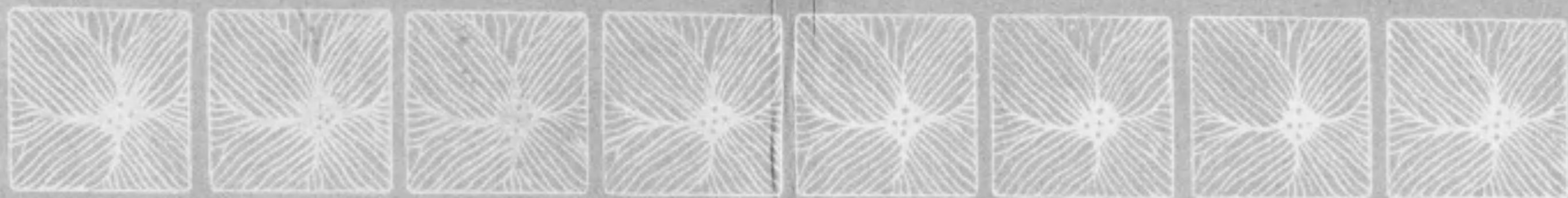
1200500713531

代名作的選集
武郎篇



始





■ 代表的名作選集 (39)

東 京
新 潮
社 出
版

泉 谷 集

有 島 武 郎 作

71
600
(39)

『生れ出づる惱み』『小さきものへ』『ドモ又の死』三篇を合せて一卷となし、『泉谷集』と題した。泉谷は、故人の雅號である。

解題

熱烈な有感と、豊富な詞藻と、作者のこの二つの特色を最も代表例に示したのは、『生れ出る惱み』の一篇である。この作は、大正七年四月の「大阪毎日新聞」に於て最初に發表された。『小さき者へ』は、同年一月の「新潮」に、初めて公にされたもので、前者と共に、作者の人道主義的精神の最も高揚せられたるもの。『ドモ又の死』は、大正十一年十月、作者の個人雜誌「泉」に於て發表されたもので、マアク・ツェンの小篇より想を得たものと作者自ら断つてゐる。純然たる創作とはいへないが、作者の戯曲家としての手腕を保證し、あはせてすぐれたるユウモリストとしての一面を示すものとして重んずるに足るであらう。

編者識



I種
W



1200500713531

生れ出る惱み

有島武郎著

目	次
生れ出る惱み……………	一
小さき者へ……………	九
ドモ又の死……………	二九

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしてゐた。ねち曲らうとする自分の心をひつばたいで、出来るだけ伸びくした眞直な明るい世界に出て、そこに自分の藝術の宮殿を築き上げやうと邁進してゐた。それは私に取つてどれ程喜ばしい事だつたらう。と同時にどれ程苦しい事だつたらう。私の心の奥底には確かに——凡ての人の心の奥底にあるのと同様な——火が燃えてはゐたけれども、その火を燦らさうとする塵芥の堆積は、又ひどいものだつた。かき除けてもく容易に火の燃え立つて来ないやうな瞬間には私は惨めだつた。私は、机の向うに開かれた窓から、多が来て雪に埋もれて行く一面の畑を見渡しながら、滞りがちな筆を叱りつけく運ばさうとしてゐた。

寒い。原稿紙の手ざりは氷のやうだつた。

陽はずん／＼暮れて行くのだつた。灰色から鼠色に、鼠色から墨色にぼかされた大きな紙を眼の前にかけて、上から下へと一氣に視線を落して行く時に感ずるやうな速さで、晝の光は夜の闇に變つて行かうとしてゐた。午後になつたと思ふ間もなく、どん／＼暮れかゝる北海道の

冬を知らないものには、日が逸早く蝕まれるこの氣味悪い淋しさは想像がつくまい。ニセコアの丘陵の裂け目から霧地にこの高原の畑地を眼がけて吹きおろして来る風は、割合に粒の大きい軽やかな初冬の雪片を煽り立てく横ざまに舞ひ飛ばした。雪片は暮れ残つた光の迷子のやうに、ちか／＼した印象を見る人の眼に與へながら、悪戯者らしく散々飛び廻つた元氣にも似ず、降りたまつた積雪の上に着るや否や、寒い濃紫の死を死んでしまふ。たゞ窓に来てあたる雪片だけがさら／＼とさ／＼やかに音を立てるばかりで、他の凡ての奴等は残らず啞だ。快活らしい白い啞の群れの舞踏——それは見る人を涙ぐませる。

私は淋しさの餘り筆をとめて窓の外を眺めて見た。而して君の事を思つた。

二

私が君に始めて會つたのは、私がまだ札幌に住んでゐた頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豊平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の一町歩程もある大きな林檎園の中に建てゝあつた。

そこに或る日の午後君 尋ねて来たのだつた。君は少し不機嫌さうな、口の重い、疍で脊丈

けが伸び切らないと云つたやうな少年だつた。汚い中學校の制服の立襟のホックをうるさうに外したまゝにしてゐた、それが妙な事には殊にはつきりと私の記憶に残つてゐる。

君は座につくとぶつきらぼうに自分の描いた畫を見て貰ひたいと云ひ出した。君は片手では抱へ切れない程油繪や水彩畫を持ちこんで來てゐた。君は自分自身を平氣で慮げる人のやうに、風呂敷包みの中から亂暴に幾枚かの畫を引き抜いて私の前に置いた。而してじつと探るやうに私の顔を見詰めた。明らさまに云ふと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思つた。而して君の方には顔も向けないで、據なく差し出された畫を取り上げて見た。

私は一目見て驚かずにはゐられなかつた。少しの修練も經てはゐないらしい幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力が籠つてゐてそれが直ぐ私を襲つたからだ。私は畫面から眼を放してもう一度君を見直さないではゐられなくなつた。でさうした。その時、君は不安らしいその癖意地張りな眼付きをして矢張り私を見續けてゐた。

「如何でせう。それなんかは下らない出來だけれども」

さう君は如何にも自分の仕事を輕蔑するやうに云つた。もう一度明らさまに云ふが、私は一方で君の畫に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思ひ昂つたやうな君の物腰には、種の反

感を覺えて、一寸皮肉でも云つて見たくなつた。「下らない出來がこれ程なら、會心の作と云ふのは大したもののでせうね」とか何んとか。

然し私は幸にも咄嗟にそんな言葉で自分を穢す事を通れたのだつた。それは私の心が美しかつたからではない。君の畫が何と云つても君自身に對する私の反感に打勝つて私に迫つてゐたからだ。

君が其時持つて來た畫の中で今でも私の心の底にまざ／＼と残つてゐる一枚がある。それは八號の風景に描かれたもので、輕川^{かろがわ}あたりの泥炭地を寫したと覺しい晩秋の風景畫だつた。荒涼と見渡す限りに連つた地平線の低い葦原を一面に蔽うた雲の隙間から、午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたつた二本ひよろ／＼と生ひ伸びた白樺の白い樹皮を力弱く照らしてゐた。單色を含んで來た筆の穂が不器用に畫布にたゞきつけられて、そのまゝけし飛んだやうな手荒な筆觸で、自然の中には決して存在しないと云はれる純白の色さへ他の色と練り合はされずに、そのまゝべとりとなすり附けてあつたりしたが、それでもじつと見てゐると、そこには作者の鋭敏な色感が存分に窺はれた。そればかりか、その畫が興へる全體の効果にも、いづつかりと纏つた氣分が行互つてゐた。悒鬱——十六七の少年には嘯めさうもない重い悒鬱を、

見る者は直ぐ感ずる事が出来た。

「大變い、ぢやありませんか」

畫に對して素直すなはになつた私の心は、私にかう云はさないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思った。すぐ次ぎの瞬間に來ると、君は然し私を疑ふやうな、自分を冷笑ふやうな冷やかな表情をして、暫らくの間私と畫とを等分に見較べてゐたが、ふいと庭の方へ顔を背けてしまつた。それは人を馬鹿にした仕打ちとも思へば思はれない事はなかつた。二人は氣まづく黙りこくつてしまつた。私は所在なさに黙つたまゝ畫を眺めつゞけてゐた。

「そいつは何所ん所が悪いんです」

突然又君の無愛相な聲がした。私は今までの妙にちぐはぐになつた氣分から、一寸自分の意見をずば／＼と云ひ出す氣にはなれないでゐた。然し改めて君の顔を見ると、云はさないぢや置かないぞと云つたやうな眞剣さが現はれてゐた。少しでも間に合はせを云はうものなら輕蔑してやるぞと云つたやうな鋭さが見えた。好し、それぢや存分に云つてやらうと私もとう／＼本統に腰を据ゑてかゝるやうにされてゐた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を云つたかは幸ひな事に今は大方忘れてしまつてゐる。然し兎に角惡口としては技巧が非常に危かしい事、自然の見方が不親切な事、モチーフが耽情的過ぎる事などを列べたに違ひない。君は黙つたまゝまぢ／＼と眼を光らせながら、私の云ふ事を聴いてゐた。私が云ひたい事だけをあげすけに云つてしまふと、君は暫らく黙りつゞけてゐたが、やがて口の隅だけに始めて笑ひらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な瘻癩とも思ひなされた。

それから二人はまた二十分程黙つたまゝで向ひ合つて坐りつゞけた。

「ぢや又持つて來ますから見て下さい。今度はもつといゝものを描いて來ます」

その沈黙の後で、君が腰を浮かせながら云つたこれ丈けの言葉は又僕を驚かせた。丸で別な、初はつな素直な子供でもいつたやうな無邪氣な明るい聲だつたから。

不思議なものは人の心の働きだ。この聲一つだつた。この聲一つが君と私とを堅く結びつけてしまつたのだつた。私は結局君を色々に邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は學校は何所です」

「東京です」

「東京？ それぢやもう始つてゐるんぢやないか」

「え」

「何故歸らないんです」

「如何しても落第點しか取れない學科があるんでいやになつたんです。……それから少し都合もあつて」

「君は畫をやる氣なんですか」

「やれるでせうか」

さう云つた時、君はまた前と同様な強情らしい人に迫るやうな顔付きになつた。

私もそれに對して何んと答へやうもなかつた。専門家でもない私が、五六枚の畫を見ただけで、その少年の未來の運命全體を如何して大膽にも決定的に云ひ切る事が出来やう。少年の思ひ入つたやうな態度を見るにつけ、私には凡てが熟ろしかつた。私は黙つてゐた。

「僕はその中郷里に——郷里は岩内です——歸ります。岩内のそばに硫黄を掘出してゐる所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その畫を作り上げて送りますから見て下さい。

……畫が好きなんだけれども、下手だから駄目です」

私の答へないのを見て、君は自分をたしなめるやうに堅い淋しい調子でかう云つた。而して私の眼の前に取り出した何枚かの作品を目茶苦茶に風呂敷に包みこんで歸つて行つてしまつた。君を木戸の所まで送り出してから、私は獨りで手廣い林檎畑の中を歩きまはつた。林檎の枝は熟した果實でたわむになつてゐた。或る樹などは葉がすっかり散り盡して、赤々とした果實だけが眞裸で累々と日にさらされてゐた。それは快く空の晴れ渡つた小春日の一日だつた。私の庭下駄に踏まれた落葉は乾いた音をたて、微塵に押しひしやがれた。豊滿の淋しさといふやうなものが空氣の中にしんみりと漂つてゐた。丁度その頃は、私も生活のある一つの岐路に立つて疑ひ迷つてゐた時だつた。私は冬を眼の前に控へた自然の前に幾度も知らず／＼棒立ちになつて、君の事と自分の事をまぜこぜに考へた。

兎に角君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまつたのだ。

その後君からは一度か二度問合せか何かの手紙が來たきりでは、つたり消息が途絶えてしまつた。岩内から來たといふ人などに邂逅と、私はよくその港にかういふ名前の青年はゐないか、その人を知らないかなぞと尋ねて見たが、更らに手がよりは得られなかつた。硫黄採掘場の風景畫もとうとう私の手許には届いて來なかつた。

かうして二年三年と月日がたつた。而して如何かした拍子に君の事を思ひ出すと、私は人生の旅路の淋しさを味つた。一度東に角顔を合せて、ある程度まで心を觸れ合つた同志が、一旦別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未來永劫復たと邂逅ない……それは何といふ不思議な、淋しい、恐ろしい事だ。人とは云ふまい、犬とでも、花とでも、塵とでもだ。孤獨に親しみ易い癖に、何所か殉情的で人なつゝこい私の心は、如何かした拍子に、この已むを得ない人間の運命をしみじみと感じて深い悵鬱に襲はれる。君も多くの人の中で私にそんな心持ちを起させる一人だつた。

而かも淺はかな私等人間は猿と同様に物忘れする。四年五年といふ歲月は君の記憶を私の心から奇麗に拭ひ取つてしまはうとしてゐたのだ。君は段々私の意識の閾を踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れて仕舞はうとしてゐたのだ。

この短かゝらぬ時間は私の身の上にも私相當の變化を惹起してゐた。私は足かけ八年住み慣れた札幌——極手短かに云つても、そこで私の上にも色々な出来事が湧き上つた。妻も迎へた。三人の子の父ともなつた。永い間の信仰から離れて教會とも縁を切つた。それまでやつてゐた仕事に段々失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲の拒絶をも無みして、そろ／＼と芽ぐみ

かけてゐた。私の眼の前の生活の道にはおぼろげながら氣味悪い不幸の雲が蔽ひかゝらうとしてゐた。私は始終私自身の力を信じていゝのか疑はねばならぬかの二筋道に迷ひぬいた——を去つて、私には物足らない都會生活が始まつた。而して眼にあまる不幸のつき／＼に足許からまくし上るのを手を拱いてじつと眺めねばならなかつた。心の中に起つたそんな危機の中で、私は捨て身になつて、見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を餘儀なくされた。それは文學者としての生活だつた。私は今度こそは全く獨りで歩かねばならぬと決心の躰を堅めた。又此の道に踏み込んだ以上は、出来ても出来なくても人類の意志と取組む覺悟をしなければならなかつた。私は始終自分の力量に疑ひを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。人々が寢入つて後、草も木も寢入つて後、獨り目覺めてしんとした夜の寂寞の中に、萬年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がよりのやうに夢中になつて筆を運ばしてゐる事もあつた。私の周囲には亡靈のやうな魂がひしめいて、紙の中に生れ出やうと苦しみあせつてゐるのをはつきりと感じた事もあつた。そんな時氣が付いて見ると、私の眼は感涙の涙に濡つてゐた。藝術に濡れたものでなくつて、さういふ時のエクスタシーを誰が味ひ得やう。然し私の心が痛ましく裂け亂れて、純一な氣持が何處の隅にも見付けられない時の淋しさは、又何んと例へやう

もない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私には何んにも残されない。私は自分の文學者である事を疑つてしまふ。文學者が文學者である事を疑ふ程、世に空虚な頼りないものが復たとあらうか。さういふ時に彼れは明らかに生命から見放なされてしまつてゐるのだ。こんな瞬間に限つて何時でも決つたやうに私の念頭に浮ぶのは君のあの時の面影だつた。自分を信じていゝのか悪いのかを決しかねて、逞ましい意志と冷刻な批評とが互に裏に戦つて、思はず知らず凡てのものに向つて敵意を含んだ君のあの面影だつた。私は筆を捨て、椅子から立ち上り、部屋の中を歩き廻りながら自分につぶやくやうに云つた。

「あの少年は如何なつたらう。道を踏み迷はないでゐてくれ。自分を誇大して取り返しつかない死出の旅をしないでゐてくれ。若し彼れに独自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、^{ダウ}萬望正直な勤勉な凡人として一生を終つてくれ。もうこの苦しみは俺れ一人だけで澤山だ」所が去年の十月——と云へば、川岸の家で偶然君と云ふものを知つてから丁度十年目だ——のある日、雨のしよぼ／＼と降つてゐる午後に一封の小包が私の手許に届いた。女中がそれを持つて來た時、私は千魚が送られたと思つた程部屋の中が生臭くなつた。包みの油紙は雨水と泥とでひどく汚れてゐて、差出人の名前が漸くの事で讀める位だつたが、そこに記された姓名を

私は誰ともはつきり思ひ出すことが出来なかつた。兎も角もと思つて私はナイフで頑丈な澁びきの麻絲を切りほごしにかゝつた。油紙を一度めくると、その中に又麻絲で堅く結へた油紙の包みがあつた。それをほごすと又油紙で包んであつた。一寸腹の立つ程念の入つた包み方で、百合根を剥がすやうに一枚々々むいて行くと、やうやく幾枚もの新聞紙の中から、手垢でよごれ切つた手製のスケッチ帖が三冊、きり／＼と棒のやうに巻き上げられたのが出て來た。私は小氣味悪い魚の匂を始終氣にしながらその手帖を擴げて見た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帖だつた。而してどれにも山と樹木ばかりが描かれてあつた。私は一眼見ると、それが明らかに北海道の風景である事を知つた。のみならず、それは明らかに本統の藝術家のみが見得る、而して描き得る深刻な自然の肖像畫だつた。

「やつつけたな」咄嗟に私は少年のままの君の面影を心一杯に描きながら下唇を噛みしめた。而して思はず微笑んだ。白狀するが、それが若し小説か戯曲であつたら、その時の私の顔には微笑の代りに苦い嫉妬の色が濃く漲つてゐたかも知れない。

その晩になつて一封の手紙が君から届いて來た。矢張り厚い畫學紙に擦り切れた筆で亂雑にかう走り書きがしてあつた。

「北海道ハ秋モ晩クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヤウニツメタイ風ガ吹イテキマス。日頃愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落葉シテシマツテキル、秋ハ人ノ心ニ色々ナ事ヲ思ハセマス。」

日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガツタカト思ハレル位空ガ美シイ時ガアリマス。然シ大テイハ風ト一所ニ雨ガバラ／＼ヤツテ來テ路ヲ照クシテキルノデス。

昨日スケッチ帖ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ書ヲ見テモライマシテカラ、故郷デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ勞働ニ追ハレテキルノデ、ツイ今年マデ畫ヲカイト見タカツタノデスガ、遂描ケナカツタノデス。

今年ノ七月カラ始メテ畫用紙ヲトヂテ畫帖ヲ作り、鉛筆デ(モノ)ニ向ツテ見マシタ。併シ勞働ニ害サレタ手ハ思フヤウニ自分ノ感力ヲ現ハス事ガ出來ナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帖ヲ見テ下サイト云フノハ大ヘンツライノデス。然シ私ハイツハラナイデ始メタ時カラノヲ全部送リマシタ(中略)。

私ノ町ノ智的素養ノ幾分ナリトモアル青年デモ、自分トイフモノニツイテ思フメグラス人ハ少ナイヤウデス。青年ノ多クハ小サクサカシクオサマツテキルモノカ、ツマラナク時ヲ無爲

ニ没ツテキマス。デスガ私ハ私ノ故郷ダカラ好キデス。

色々ナモノガ私ノ心ヲオドラセマス、私ノスケッチニ取ルベキ所ノアルモノガアルデセウカ。私ハ何トナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テモラウノガハツカシイノデス

山ハ色具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテキルヤウニ描イテ見タイモノダト思ツテキマス。私ノスケッチデハ私ノ感じガドウモ出ナイデコマリマス。私ノ山ハ私ガ實際ニ感じルヨリモアマリ平面ノヤウデス。樹木モドウモ物體感ニトホシク思ハレマス。

色ヲツケテ見タラヨカラウト考ヘテキマスガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテキルノデス。

私ハ色々ナ繪圖デ頭ガ一バイニナツテキルノデスガ、何シロマダ描クダケノ腦ガナイヤウデス。御忙シイあなたニコンナ無遠リヨヲカケテ大ヘンスマナク思ツテキマス。イツカ御ヒマガアツタラ御教示ヲ願ヒマス。

十月末

かう思つたまゝを書きなぐつた手紙がどれ程私を動かしたか、君には一寸想像がつかまい。自分が文藝者であるだけに、私は他人の書いた文字の中にも眞實と虚偽とを直感する可なり鋭い

能力が發達してゐる。私は君の手紙を讀んでゐる中に涙ぐんでしまつた。魚臭い油紙と、立派な藝術品であるスケッチ帖と、君の文字との間には一分の隙もなかつた。「感力」といふ君の造語は立派な内容を持つ言葉として私の胸に響いた。「山は色具をドツシリツケテ山ガ地上カラ空へモレアガツテキルヤウニ描イテ見タイ」……山が地上から空にもれあがる……それは素晴らしい自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中に沁み互つたこの力は、軽く對象を見て過ごす微温な心の、眞似にも生み出し得ない調子を持つた言葉だ。

「誰れも氣も付かず注意も拂はない地球の隅つこで、尊い一つの魂が母胎を破り出やうとして苦んでゐる」

私はさう思つたのだ。さう思ふとこの地球といふものが急により美しいものに感じられたのだ。さう感ずると何となく涙ぐんでしまつたのだ。

その頃私は北海道行きを計畫してゐたが、雜用に紛れて躊躇する中に寒くなりかけて來たので、もう一層やめやうかと思つてゐた所だつた。然し君のスケッチ帖と手紙とを見ると、是非君に會つて見たくなつて、一徹にすぐ旅行の準備にかゝつた。その日から一週間とたゝない十一月の五日には、もう上野驛から青森への直行列車に乗つてゐる私自身を見出した。

札幌での用事を済まして農場に行く前に、私は岩内にあてゝ君に手紙を出して置いた。農場からはさう遠くもないから、來られるなら來ないか、成るべくならお目に懸りたいからと云つて。

農場に着いた日には君は見えなかつた。その翌日は朝から雪が降り出した。私は窓の所へ机を持つて行つて、原稿紙に向つて呻吟しながら心待ちに君を待つのだつた。而して澁り勝ちな筆を休ませる間に、今まで書き連らねて來たやうな過去の回想やら、當面の期待やらをつぎつぎに腦裡に浮ましてゐたのだつた。

三

夕闇は段々深かまつて行つた。事務所をあづかる男が、ランプを持つて來た序に、夜食の膳を運ばうかと尋ねたが、私はひよつとすると君が來はしないかと云ふ心づかひから、わざとその儘にしておいて貰つて、またかじり附くやうに原稿紙に向つた。大きな男の姿が部屋からのつそりと消えて行くのを、細覺のはづれに感じて、都會から久しぶりで來て見ると、物でも人でも大きくゆつたりしてゐるのに、今更らながら一種の壓迫をさへ感ずるのだつた。

澁りがちな筆がいくらもはかどらない中に、夕闇はどん／＼夜の暗さに代つて、窓ガラスの

先方は雪と闇とのぼんやりした明暗キヤロスキユロになつてしまつた。自然は何かに氣を障へ出したやうに、夜と共に荒れ始めてゐた。底力の籠つた鈍い空氣が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがつて、んと凭れかゝるのが、農の上に坐つてゐても何んとなく感じられた。自然が粉雪を漏りたて、處きらはずにたゞきつながら、のたうち廻つて舞き叫ぶその物凄しい氣配はもう迫つてゐた。私は窓ガラスに白木綿のカーテンを引いた。自然の暴威をせき止める爲めに人間が苦心して削り上げたこのみじめな家屋といふ領土が脆く小さく私の周圍に眺めやられた。突然ど、ど、ど……といふ音が——運動が（さういふ場合、音と運動との區別はない）天地に起つた。さあ始つたと私は二つに折つた背中を思はず立て直した。同時に自然は上齒を下唇にあてがつて思ひきり長く息氣を吹いた。家がぐら／＼と揺れた。地面から跳り上つた雪が二三度弾みを取つておいて、どつと一氣に天に向つて、謀反でもするやうに、降りかゝつて行くあの悲壯な光景が、まゞ／＼と部屋の中にすくんでゐる私の想像に浮べられた。駄目だ。待つた所がもう君は來やしない。停車場からの雪道はもう疾うに埋つてしまつたに違ひないから。私は吹雪の底にひたりながら、物淋しくさう思つて、又枕の上に眼を落した。筆は谷溝るばかりだつた。軽い陣痛のやうなもの時々起りはしたが、大切な文字は生れ出

てくれなかつた。かうして私に取つて情けないもどかしい時間が三十分も過ぎた頃だつたらう、農場の男が又のそりと部屋に這入つて來て客來を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事が出来る。矢張り來てくれたのだ。私は直ぐに立つて事務室の方へかけ附けた。事務室の障子を開けて、二疊敷程もある大圍爐裡の切られた臺所に出て見ると、その土間に、一人の男がまだ靴も脱がずに突立つてゐた。農場の男も、その男にふさはしく肥つて大きな内儀さんも、普通の背丈けにしか見えない程その客といふ男は大きかつた。言葉通りの巨人だ。頭からすつぽりと頭巾のついた黒つぽい外套を着て、雪まみれになつて、口から白い息氣をむら／＼と吐き出すその姿は、實際人間といふ感じを起させない程だつた。子供までがおびえた眼付きをして内儀さんの膝の上に丸まりながら、その男をうろ／＼らしく見詰めてゐた。

君ではなかつたなと思ふと僕は期待に裏切られた失望の爲めに、いら／＼しかけてゐた神經のもどかしい感じが更らにつのるのを覺えた。

「さ、ま、ずつとこつちにお上りなすつて」

農場の男は僕の客だといふので出来るだけ丁寧にかう云つて、圍爐裡のそばの煎餅蒲團を裏返へした。

その男は一寸頭で挨拶して圍爐裡の座に這入つて来たが、天井の高いだぶつ廣い裏所に灯された五分心のランプと、ちよろ／＼と燃える木節まぶせの圍爐裡火とは、黒い大きな塊ツツ的ツツとよりこの男を照さなかつた。男がぐつしより濕つた兵隊の古長靴を脱ぐのを待つて、私は黙つたまゝ案内に立つた。今はもう、この男によつて、無駄な時間がつぶされないやうに、いやな氣分にさせられないやうにと心竊かに願ひながら。

部屋に這入つて二人が座についてから、私は始めて本統にその男を見た。男はぶきつちやうに、それでも四角に下座に坐つて、叮嚀に頭を下げた。

「暫らく」

八疊の座敷に餘るやうな鋪を帯びた太い聲がした。

「あなたは誰方ですか」

大きな男は一寸きまりが照さうに汗でしとどになつた眞赤な額を撫でた。

「大本です」

「え、大本君?」

これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげ／＼と見直さなければならなかつた。番

の爲めに背丈けも伸び切らない、何所か病質にさへ見えた惘鬱な少年時代の君の面影は何所にあるのだらう。又落葉松の幹の表皮からあすここゝに覗き出してゐる針葉の一本をも見逃さず、愛撫し理解しやうとする、スケッチ帖で想像されるやうな鋭敏な神経の所有者らしい姿はどこにあるのだらう。地をつぶしてさしこをした厚衣あつしを二枚重ね着して、どつしりと落付いた君の坐り形は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛上つた肩の上に正しく嵌め込まれた、牡牛のやうに太い頸に、稍長めな赤銅色の君の顔は、健康そのものゝやうにしつかりと乗つてゐた。筋肉質な君の顔は、何所から何所まで引締つてゐたが、輪廓の正しい眼鼻立ちの隈々には、心の中から湧いて出る寛大な微笑の影が、自然に漂つてゐて、時防氣のない君の容貌をも暖かく見せてゐた。「何といふ無類な完全な若者だらう。」私は心の中でかゝり感歎した。戀人を君に紹介する男は、深い猜疑の眼で戀人の心を見守らずにはゐられまい。君の與へる素晴らしい男らしい印象はそんな事まで私に思はせた。

「吹雪いてひどかつたらう」

「何んの。……温ぬくくつて／＼汗がはあえらく出ました。けんど道が分んねえで困つてると、仕合せよく水車番に遇つたからすぐ知れました。あれは親身しんみな人だつけ」

君の素直な心はすぐ人の心に觸れると見える。あの水車番といふのは實際この邊で珍らしく心持ちのいい男だ。君は手拭を腰から抜いて湯氣が立たんばかりに汗になつた顔を幾度も押拭つた。

夜食の膳が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と云つて、君は今まで堅くしてゐた膝を崩して胡坐をかいた。「きちやうめんに坐ることなんぞはあ無えもんだから。」二人は子供同志のやうな楽しい心で膳に向つた。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶碗に三杯續けさまに飲む人を私は始めて見た。

夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りかはされた楽しい會話を私は今だに同じ楽しさを以つて思ひ出す。戸外ではこゝを先途と嵐が荒れまくつてゐた。部屋の中ではストーブの向席に胡坐をかいて、癖のやうに時折り五分刈りの濃い頭の毛を逆さに撫で上げる男惚れのする君の顔が部屋を明るくしてゐた。君は頑丈な文鎮になつて小さな部屋を吹雪から守るやうに見えた。温まるにつれて、君の周圍から蒸れ立つ生臭い魚の香は強く部屋中に籠つたけれども、それは荒い大海を生々しく聯想させるだけで、何んの不愉快な感じも起させなかつた。人の感覺といふものも氣極なものだ。

楽しい會話と云つた。然しそれは面白いと云ふ意味では勿論ない。何故なれば君は屢不器用な言葉の尻を消して、曇つた顔をしたなければならなかつたから。而して私も君の苦しい立場や、自分自身の迷ひ勝ちな生活を痛感して、暗い心に捕へられねばならなかつたから。

その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪廓を私はこゝにざつと書き連ねずには置けない。

幟で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊學すべき途が絶たれてゐただつた。一時北海道の西海岸で、小樽をすら凌駕して賑やかになりさうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも發展しないばかりか、段々さびれて行くばかりだつたので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが増へられて來た。君の父上と兄上と妹とが氣を揃へて水入らずにせつせと働くにも係らず、そろ／＼と泥沼の中に減入り込むやうな家運の衰勢を如何する事も出来なかつた。學問といふものに興味がなく、従つて成績の面白くなかつた君が、藝術に捧誓したい熱意を拘きながら、その淋しくなりまさる古い港に歸る心持ちになつたのはその爲めだつた。さういふ事を考へ合はすと、あの時君が何んとなく暗い顔付きをして、いら／＼と見えたのが、つきり分るやうだ。君は故郷に歸つても、仕事の暇々には、心あてにしてゐる景巴

でも描く事を、せめてはの頼みにして札幌を立去つて行つたのだらう。

然し君の家庭が君に待ち設けてゐたものは、そんな餘裕のある生活ではなかつた。年のいつた父上と、どつちかと云へば漁夫としての健康は持ち合はせてゐない兄上とが、普通の漁夫と少しも變りのない服装で細かすきながら君の歸りを迎へた時、大きい漁場の持主といふ風が家の中から根こそぎ無くなつてゐるのを眼のあたりに見やつた時、君はそれまでの考への呑氣過ぎたのに氣が付いたに違ひない。十分の思慮もせずこんな生活の渦巻きの中に我れから飛び込んだのを、君の藝術的欲求は何所かで悔んでゐた。その晩磯臭い空氣の籠つた部屋の中で、枕にはつきながら、陥罪にかゝつた獸のやうな焦燥さを感じて、險を合はす事が出来なかつたと君は私に告白した。さうだつたらう。その晩一晩だけの君の心持ちを委しく考へただけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事が出来ると思ふ。

然し親思ひで妻直な心を持つて生まれた君は、君を迎へ入れやうとする生活から逃れ出る事をしなかつたのだ。詰め襟のホックをかけずに着慣れた學校服を脱ぎ捨て、君は厚衣を羽織る身になつた。明鯛から鱈、鱈から鯨、鯨から烏賊といふやうに、四季絶える事のない忙しい漁撈の仕事にたづさはりながら、君は一年中かの北海の荒浪や激しい氣候と戦つて、淋しい漁夫

の生活に没頭しなければならなかつた。而かも港内に築かれた防波堤が、技師の飛んでもない計算違ひから、波を防ぐ代りに、砂をどん／＼港内に流し入れる破目になつてから、船繋りのよかつた海岸は見る／＼淺瀬に變つて、出漁には都合のいゝ目ぬきの位置にあつた君の漁場は廢れ物同様になつてしまひ、已むなく高い駄賃を出して他人の漁場を使はなければならなくなつたのと、北海道第一と云はれた鯨の群來が年々減つて行く爲めに、さらぬだに生活の壓迫を感じて來てゐた君の家は、親子が氣心を揃へ力を合はして、命がけに働いても年々貧窮に追ひ迫られ勝ちになつて行つた。

親身な、やさしい、而して男らしい心に生れた君は、黙つてこの有様を見て過ごす事は出来なくなつた。君は君に近いものゝ生活の爲めに、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥ぢたりしてはゐられなくなつた。而して君は舊地に勞働生活の眞中心に乗り出した。寒暑と波濤と力業と荒くれ男等との交りは君の筋骨と度胸とを鐵のやうに鍛へ上げた。君はすく／＼と大木のやうに逞しくなつた。

「岩内にも漁夫は多いとも腕力にかけて俺らに叶ふものは一人だつてゐねえ」

君はあたり前の事を云つて聞かせるやうにかう云つた。私の前に坐つた君の姿は私にそれを

信ぜしめる。

パンの爲めに生活のどん底まで沈み切つた十年の月日——それは短いものではない。大抵の人は恐らくその年月の間にさう云ふ生活から跳ね返る力を失つてしまふだらう。世の中を見渡すと、何百萬、何千萬の人々が、こんな生活にその天授の特殊な力を踏みしだかれて、空しく墳墓の草となつてしまつたらう。それは全く悲しい事だ。而して不條理な事だ。然し誰がこの不條理な世相に非難の石を抛つことが出来るだらう。是れは悲しくも私達の一人々々が肩の上に背負はなければならぬ不條理だ。特異な力を埋め盡してまでも、當面の生活に没頭しなればならない人々に對して、私達は尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事實だ。あるがまゝの實相だ。

パンの爲めに精力のあらん限りを用ひ盡さねばならぬ十年——それは短いものではない。それにも係らず、君は性格の中に植ゑ込まれた憧憬を一刻も捨てなかつたのだ。捨てる事が出来なかつたのだ。

雨の爲めとか、風の爲めとか、一日も安閑としてはゐられない漁夫の生活にも、爲す事なく日を過さねばならぬ幾日かど、一年の間には偶に來る。さう云ふ時に、君は一冊のスケッチ帖

(小學校用の粗雑な畫學紙を不器用に細絲で綴つたそれ)と一本の鉛筆とを、魚の鱗や肉片がこびりついたまゝ、ごわ／＼に乾いた仕事着の懷ろにねぢ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「遇ふ人は俺ら事氣違ひだといふんです。けんど俺ら山をじつとかう見てみると、何もかも忘れてしまふです。誰だつたか、何かの雑誌で『愛は奪ふ』と云ふものを書いて、人間が物を愛するのはその物を強奪ふんたくるだと云つてゐたやうだが、俺ら山を見てみると、そんな氣は起したくも起らないね。山がしつくり俺ら事引ずり込んでしまつて、俺ら唯呆れて見てゐるだけです。その心持ちが描いて見たくつて、あんな下手なものをやつて見るが、から駄目です。あんな山の心持ちを描いた畫があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天氣のいゝ氣持のいゝ日に、うんと力癩を入れてやつて見たらと思ふけんど、暮暮しも忙ましいし、やつても俺らには、やつぱり手に餘るだらう。色も付けて見たいが、繪具は國に引込む時、繪の好きな友達にくれてしまつたから、俺らのやうな繪には又買ふのも惜しいし。海を見れば海でいゝが、山を見れば山でいゝ。勿體ない位そこいらに素暗らしい好いものがあるんだが、力が足んねえです」

と云つたりする君の言葉も容子も私には忘れる事の出来ないものになつた。その時は胡坐に

した兩脛を手でつぶれさうに堅く握つて、胸に餘る昂奮を静かな太い聲でおとなしく云ひ現はさうとしてゐた。

私共が一時過ぎまで語り合つて寢床に這入つて後も、吹きまく吹雪は露ほども力をゆるめなかつた。君は君で、私は私で、妙に寢つかれない一夜だつた。踏まれても踏まれても、自然が與へた美妙な優しい心を失はない、失ひ得ない君の事を思つた。仁王のやうな逞ましい君の肉體に、少女のやうに敏感な魂を見出すのは、この上なく美しい事に私には思へた。君一人が人生の生活といふものを明るくしてゐるやうにさへ思へた。而して私は段々私の仕事の事を考へた。どんなに蕩擻いて見てもまだ、本統に自分の所有を見出す事が出来ないで、動もするとこぢれた反抗や敵愾心から一時的な満足を求めたり、生活を歪んで見る事に興味を得やうとしたりする心の贅しさ——それが私を無念がらせた。而してその夜は、君のいかにも自然な大きな成長と、その成長に對して君が持つ無意識な謙讓と執着とが私の心に強い感激を起させた。

次ぎの日の朝、かうしてはゐられないと云つて、君は嵐の中に歸り仕度をした。農場の男達すらも少し空模様を見てからにしろと強ひて止めるのも聞かず、君は素足にかちん／＼に凍つた兵隊長靴をはいて、黒い外套をしつかり着こんで土間に立つた。北國の冬の日暮しには殊

更ら客がなつかしまれるものだ。名残を心から惜んでだらう、農場の人達も親身に彼是れと君を勞つた。すつかり頭巾を被つて、十二分に身仕度をしてから出懸けたらいゝだらうと皆んなが寄つて勧めたけれども、君は素朴な憚りから帽子も被らずに、重々しい口調で別れの挨拶をすますと、ガラス戸を引開けて戸外に出た。

私がガラス窓をこづいて、外面に降り積んだ雪を落しながら、吹き溜つた眞白な雪の中をこいで行く君を見送つた。君の黒い姿は——矢張頭巾は被らないまゝで、頭をむき出しにして雪になぶらせた——君の黒い姿は、白い地面に腰まで埋つて、或は濃く、或は薄く、縞になつて横降りに降りしきる雪の中を、たゞ一人段々遠ざかつて、とう／＼霞んで見えなくなつてしまつた。

而して君に取り残された事務所は、君の来る前のやうな單調な淋しさと降りつむ雪とに閉ぢこめられてしまつた。

私がそこを發つて東京に歸つたのは、それから三四日後の事だつた。

四

今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面

は胸を張り擽げ、吸ひ込んでゐる。君の住む岩内の津の水は、まだ流れこむ雪解の水に薄濁る程にもなつてはゐまい。細鐵を水で溶かしたような海面が、動もすると角立つた波を擽げて、岸を目がけて終日攻めよせてゐるだらう。それにしてももう老いさらばへた雪道を器用に拾ひながら、金魚賣りが天秤棒を擔つて、無理にも春を喚び覺ますやうな賣聲を立てる季節にはなつたらう。濱には津輕や秋田邊から集つて來た旅雁のやうな漁夫達が、鯨の建網たてあみの修繕をしたり、大釜の据ゑ付けをしたりして、黒ずんだ自然の中に、毛布の甲がけや外套のけばくしい赤色を播き散らす季節にはなつたらう。この頃私は又妙に君を思ひ出す。君の張り切つた生活の有様を頭に描く、君はまざく／＼と私の想像の視野に現はれ出て來て、見るやうに君の生活とその周圍とを私に見せてくれる。藝術家に取つては夢と現との闘たたかはないと云つていゝ。彼れは現實を見ながら眠つてゐる事がある。夢を見ながら眼を開いてゐる事がある。私が私の想像にまかせて、こゝに君の姿を寫し出して見る事を君は拒むだらうか。私の鈍い頭にも同感といふものの力がどの位働き得るかを私は自分で試して見たいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてかゝらう。

君を思ひ出すにつけて、私の頭にすぐ浮び出て來るのは、何んと云つても淋しく物すさまじ

い北海道の冬の光景だ。

五

長い冬の夜はまだ明けない。雷電時と反對の灣の一角から長く突き出た造り損ねの防波堤は、大蛇の亡骸むくろのやうな眞黒い姿を遠く海の面に横へて、夜目にも白く見える波濤の牙が、小休みもなくその胸腹に喰ひかゝつてゐる。砂濱まに繫もはれた百艘近い大和船やまとぶねは、舳へそを沖の方へ向けて、互にしがみ付きながら、長い帆柱を左右前後に振り立てゝゐる。その側に、様々の漁具と蟬當のお櫃とを持つて集つて來た漁夫達は、言葉少なに物を云ひ交はしながら、防波堤の上に建てられた組合の天氣豫報の信號燈を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の眼のやうにきらりと光つてゐる。赤と白との二つ球は、危険警戒を標示する信號だ。船を出すには一番鳥が啼きわたる時刻まで待つてからにしたければならぬ。町の方は寢鎮まつて灯一つ見えない。それ等の凡てを被ひくるめて凍つた雲は暮のやうに空低く懸つてゐる。音を立てないばかりに雲は山の方から沖の方へと絶間なく走り廻ける。汀まで雪に埋まつた海岸には、見渡せる限り、白波がざぶ／＼砕けて、風が――空氣そのものをつつてしまひさうな激し

い寒い風が雪に閉された山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくつて、暮地に水と空との閉ぢ目を眼がけて突きぬけて行く。

漁夫達の群れから少し離れて、一團りになつたお内儀さん達の背中から赤子の激しい泣き聲が起る。暫らくしてそれが鎮まると、風の生み出す音の高い不田譚な沈黙がまた天と地とに漲り満ちる。

稍二時間も経つたと思ふ頃、綾目も知れない闇の中から、硫黄ヶ嶽の山頂——右肩を聳やかして、左を撫で肩にした——が雲の産んだ鬼子のやうに、空中に現はれ出る。鈍い土がまだ振り向きもしない中に、空は逸早くも曉の光を吸ひ初めたのだ。

横笛船（港内に四五艘あるのだが、船も大きいし、それに老練な漁夫が乗り込んでゐて、他の船に懸引き進退の合圖をする）の船頭が顔を鳩めて相談をし始める。何處とも知れず、あの雲には氣疎い羽色を持つた鳥の聲が勇ましく聞こえ出す。漁夫達の群れもお内儀さん達の圍りも、石のやうな不動の沈黙から急に生き返つて来る。

「出すべ」

そのさよめきの間に、潮で錆び切つた老船頭の幅の廣い嘆辛聲が高くかう響く。

漁夫達は力強い鈍さを以て、互に今まで立ち盡してゐた所を歩み離れて銘々の持ち場につく。お内儀さん達は右に左に良人や兄や情人やを介抱して駆け歩く。今まで陶酔したやうに他愛もなく波に揺られてゐた船の體には、漁夫達が膝頭まで水に浸つて、喚き始める。罵り騒ぐ聲が一としきり聞こえたと思ふと、船は、據ななさうに、右に左に揺ぎながら、船首を高く擡げて波頭を切り開き、狂ひ暴れる波打際から離れて行く。最後の高い罵りの聲と共に、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は猿のやうに船の上に乗び乗つてゐる。動ともすると軸を岸に向けやうとする船の中からは、長い竿が水の中に幾本も突き込まれる。船は已むを得ず又立ち直つて沖を眼指す。

この出船の時の人々の氣組み働きは、誰にでも激烈なアレグロで終る音楽の一片を思ひ起さすだらう。がや／＼と騒ぐ、聴衆のやうな雲や波の擾亂の中から、漁夫達の鈍い *Largo Piu- nissimo* とも云ふべき運動が起つて、それが始めの中は周囲の騒音の中に消されてゐるけれども、段々とその運動は熱情的となり力附いて行つて、霞を得たやうに、漁夫の乗り込んだ船が波を切り波を切り、段々と早くなる一定のテンポを取つて沖に乗り出して行く様は、力強い樂手の手で思ひ存分大膽に奏でられる *Allegro molto* を思ひ出させずには置かぬだらう。凡ての

ものゝ緊張した其處には、いつでも音楽が生れるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船縁からは百足蟲のやうに櫂の足を出し、艦からは鯨のやうに舵の尾を出して、あの物悲しい北國特有な漁夫の懸聲に勵まされながら、眞暗に襲ひかゝる波のしぶきを凌ぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。海岸に一團りになつて船を見送る女達の群れはもう命のない黒い石ころのやうにしか見えない。漁夫達は櫂を漕ぎながら、帆網を整へながら、浸水を汲み出しながら、その黒い石ころと、檣船の艦から一の字を引いて怪火のやうに流れる炭火の火の子とを眺めやる。長い鐵の火箸に火の起つた炭を挟んで高く擧げると、それが風を喰つて盛んに火の子を飛ばすのだ。凡ての船は始終それを目あてにして進退をしなければならぬ。炭火が一つ擧げられた時には、天候の悪くなる印しと見て船を停め、二つ擧げられた時には安全になつた印しとして再び進まねばならぬのだ。颯爾を、物々しく立騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い焰を放つて、燃え上り燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫達の命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物凄さを以て海の上に長く尾を引きながら消えて行く。

何處からともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立て、風を切りながら、船の上に現は

れて来る。猫のやうな聲で小さく呼び交はすこの海の沙漠の漂浪者は、さつと落ちて来て波に腹を撫でさすかと思ふと、翼を返へして高く舞ひ上り、やゝ暫らく風に逆つてじつとこたへてから、思ひ直したやうに打連れて、小氣味よく風に流されて行く。その白い羽根がある瞬間には明るく、ある瞬間には暗く見え出すと、長い北國の夜もやうやく明け離れて行かうとするのだ。夜の闇は暗く濃く沖の方に追ひつめられて、東の空には黎明の新しい光が雲を破り始める。吻すさまじい朝焼けだ。過つて海に落ち込んだ悪魔が、肉付きのいゝ右の肩だけを波の上に現はしてゐる、その肩のやうな雷電峠の絶巔を撫でたり敲いたりして叢立ち急ぐ嵐雲は、爐に投げ入れられた紫のやうな光に燃えて、山懐ろの雪までも透明な藤色に染めてしまふ。それにしても明け方のこの暖い光の色に比べて、何んと云ふ寒い空の風だ。長い夜の爲めに冷え切つた地球は、今その一番冷たい呼吸を呼吸してゐるのだ。

私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のやうに小さくなつた船の中で、君は配繩の用意をしながら、恐ろしいまでに莊嚴なこの日の序幕を眺めてゐるのだ。君の父上は舵座に胡坐をかいて、時々晴雨計を見やりながら、變化の烈しいその頃の天氣模様を考へてゐる。海の中から生れて来たやうな老漁夫の、皺にたゞまれた鋭い眼は、雲一片の微をさへ見落すま

いと注意しながら、顔には木彫のやうな深い落付きを見せてゐる。君の兄上は、凍つて自由に
ならない手の平を腰のあたりの荒布に擦りつけて熱を呼び起しながら、帆綱を搦つて風の向き
と早さに應じて帆を立て直してゐる。備はれた二人の漁夫は二人の漁夫で、二尋置きに本繩か
ら下つた針に餌をつけるのに忙はしい。海の上を見渡すと、港を出てから、んんんんばら／＼に
散らばつて、朝の光に白い帆をかどやかした船といふ船は、等しく沖を眼かけて波を切り開い
て走りながら、君の船と同様な仕事にいそしんでゐるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との變り目が来て、さすがに荒れがちな北國の冬の海の上も暫
らくは穏かになる。やがて瀬は達せられる。君等は水の色を一眼見たばかりで、海中に突き入
つた陸地と海そのものゝ界とも云ふべき瀬がどう走つてゐるかを直ぐ見て取る事が出来る。

帆が下ろされる。勢で走りつゞける船足は、舵の爲めに右なり左なりに向け直される。同時
に浮標の附いた配繩はいじまの一端が氷のやうな波の中にざぶん／＼と投げこまれる。二十五町から三
十町に餘る長さを持つた繩全體が、海上に長々と横たへられる迄には、朝早くから始めても、日
か子午線近く来るまでかゝらねばならないのだ。君等の船は櫂こに操られて、横波を食ひながら
しぶ／＼進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒氣の爲めに比重の高くなつた海の水は、凍りか

かつた油のやうな重さで、物凄しい印度藍の底の方に、雲間を漏れる日光で鈍く光る配繩の餌を
呑み込んで行く。

今まで花のやうな模様を描いて、海面の所々に日光を蕪んでゐた空が、急にざつと潰曇ると、
何處からともなく時雨のやうに霰が降つて来て海面を洶立たす。船と船とは、見る／＼薄い繩
のやうな青白い膜に距てられる。君の周圍には小さな白い粒が乾き切つた音を立て、慌だし
く船板を打つ。君は小賢しいこの邪魔者から毛糸の襟巻きで包んだ顔をそむけながら、配繩を
丹念に下ろし續ける。

すつと空が明るくなる。霰は何處かへ行つてしまつた。而して眞青な海面に、漁船は蔭にな
り日向になり、堅い輪廓を描いて、波にもまれながら淋しく漂つてゐる。

端々買ひな天氣は、一日の中に幾度となくかうした顔のしかめ方をする。而して日が西に廻
るに従つてこの不機嫌は募つて行くばかりだ。

寒暑をかまつてゐられない漁夫達も吹きざらしの寒さにはひるまずにはゐられない。配繩を
投げ終ると、身ふるひしながら五人の男は、舵座におこされた焔爐の火の圍りに慕ひ寄つて、
大きなお櫃から握り飯を鷲掴みに掴み出して喰ひ貪る。港を出る時には一かたまりになつてゐ

た友船も、今は木の葉のやうに小さく互々からかけ隔つて、心細い弱々しさうな姿を、涯もなく露領に續く海原のこゝかしこに漂はせてゐる。三里の餘も離れた陸地は、高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のやうに、雲の蔭になつた所は鉛のやうに、妙に險しい輪廓を描いてゐる。

漁夫達は口を食物で頬張らせながら、昨日の漁の有様や、今日の豫想やらをいかにも地味な口調で語り合つてゐる。さういふ時に君だけは自分が彼等の間に不思議な異邦人である事に氣付く。同じ櫓を操り、同じ帆綱をあつかひながら、何んといふ悲しい心の距りだらう。押し潰してしまはうと幾度試みても、すぐ後からまくしかゝつて来る藝術に對する執着をどうすることも出来なかつた。

とはいへ、飛行機の將校にすらならうといふ人の少ない世の中に、生きては人の冒險心をそゝつて如何にも雄々しい頼み甲斐ある男と見え、死んでは萬人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、遺族まで生活の保障を與へられる飛行將校にすらならうといふ人の少ない世の中に、荒れでも晴れても毎日毎日、一命を放つてかゝつて、緊張し切つた終日の勞働に、玉の緒で炊き上げたやうな飯を食つて一生を過ごして行かねばならぬ漁夫の生活、それには聊かも遊戯的な餘裕

がないだけに、命とかけがへの眞實な仕事であるだけに、言葉には現はし得ない程の尊さと嚴肅さを持つてゐる。況してや彼等がこの目覚ましい健氣な生活を、已むを得ぬ、苦しい、然し當然な正しい生活として、誇りもなく、矯飾もなく、不平もなく素直に受け取り、輒にかゝつた砲牛のやうな柔順な忍耐と覺悟とを以て、勇ましく迎へ入れてゐる、その姿を見ると、君は人間の運命の果敢なさと美しさとに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思ふにつけて、君の心の眼にはまさしくと離破船の痛ましい光景が浮び出る。君は矢張り舵座に坐つて他の漁夫と同様に握り飯を食つてはゐるが、何時の間にか人々の會話からは遠のいて、物思はしげに黙りこくつてしまふ。而して果てしもなく回想の迷路を辿つて歩く。

六

それはある年の三月に君が遭遇した苦がい経験の一つだ。模範船からすぐ引き上げると云ふ信號がかゝつたので、今までも氣遣ひながら仕事を續けてゐた漁船は、打ち込み打ち込む波濤と戦ひながら配繩をたくし上げにかゝつたけれども、吹き始めた暴風は一秒毎に募るばかりで、

船頭は已むなく配繩を切つて捨てさせなければならなくなつた。

「又はあ錢ねこ海さ捨てるだ」

と君の父上は心から歎息してつぶやきながら君に命じて配繩を切つてしまつた。

海の上は唯狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくので、つるし上げられるやうに高まつた三角波が互に競つて取組み合ふと、取組み合つただけの波は忽ち眞白な泡の山に變じて、その巔が風にちぎられながら、すさまじい勢ひで目あてもなく倒れかゝる。眼も向けられないやうな濃い雪の群れは、波を追つたり波から遁れたり、宛ら風の怒りを挑む小悪魔のやうに、而憎く舞ひながら右往左往に飛びはねる。吹き落して來た雲のちぎれは、大きな霧のかたまりになつて、海とすれ／＼に波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。

雪と浸水オクとで糊よりも滑る船板の上を君は這ふやうにして舳へまの方へにじり寄り、左の手に友綱の鐵環をしつかりと握つて腰を据ゑながら、右手に磁石をかまへて、大聲で船の進路を後るに傳へる。二人の漁夫は大竿を風上になつた舷から二本突き出して動かないやうに結びつける。船の顛覆を少しなりとも防がう爲めだ。君の兄上は帆綱を握つて、舵座にゐる父上の合圖通りに

帆の上げ下げを誤るまいと一心になつてゐる。而してその間にもしつかり、なしに打ち込む浸水を急がしく汲んでは舷から捨てゝある。命懸けに呼びかはす互々の聲は妙に上ずつて、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物凄くも心強くも響いて來る。

「おも舵っ」

「右にかはすだつてえば」

「右だ……右だぞっ」

「帆綱をしめろやっ」

「友船は見えねえかよう。あたら／＼、つげやーい」

如何吹かうかと躊躇つてゐたやうな疾風がやがてしつかり方向を定めると、是れまで唯あてもなく立ち騒いでゐたらしく見える三角波は、段々と丘陵のやうな紆濤ウネリに變つて行つた。言葉通りに水平に吹雪く雪の中を、後ろの方から、見上げるやうな大きな水の堆積が、想像も及ばない早さでひた押しに押しして來る。

「來たぞーっ」

緊張し切つた五人の心は又更らに恐ろしい緊張を加へた。眩しい程早かつた船足が急によど

んで、後ろに吸ひ寄せられて、艦が薄氣味悪く持ち上つて、船中に置かれた品物ががら／＼と音をたて、前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定めなほさなければならなくなつた瞬間に、船は一と煽り煽つて、物凄く不動から、奈落の底までもと凄じい勢で波の背を滑り下つた。同時に耳に餘る大きな音をたて、紆濤は屏風倒しに倒れかゝる。湧きかへるやうな泡の混亂の中に船を揉まれながら行手を見ると、一旦壊れた波はすぐ又物凄く丘陵に立ちかへつて、眼の前の空を高くしきりながら、見る／＼悪夢のやうに遠ざかつて行く。

ほつと安堵の息氣をつく隙も與へず、後ろを見れば又紆濤だ。水の山だ。その時、

「危ねえ」

「ぼきりっ」

と云ふけた／＼ましいい聲を同時に君は聞いた。而して同時に野獸の敏感さを以て身構へしながら後ろを振り向いた。根許から折れて横倒しに倒れかゝる帆柱と、急に命を失つたやうに皺になつてた／＼まる帆布と、その蔭から、飛び出しさうに眼をむいて、大きく口を開けた君の兄上の顔とが映つた。

君は咄嗟に身をかはして、頭から打つてかゝらうとする帆柱から身をかばつた。人々は騒ぎ

立つて櫓を構へやうとひしめいた。けれど無二無三な船足の動搖には打ち勝てなかつた。帆の自由である限りは金輪際船を顛覆させないだけの自信を持つた人達も、帆を奪ひ取られては途方に暮れないではゐられなかつた。船足のとまつた船ではもう舵も利かない。船は波の動搖のままに／＼勝手放題に荒れ狂つた。

第一の紆濤、第二の紆濤、第三の紆濤には天運が船を顛覆から庇つてくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は観念しなければならなかつた。

雪の爲めに薄くぼかさされた眞黒な大きな山、その頂からは、火が燃え立つやうに、ちらり／＼白い波頭が立つては消え、消えては立ちして、瞬間毎に高さを増して行つた。吹き荒れる風すらがその爲めに遮りとめられて、船の周囲には氣味の悪い静かさが満ち擴がつた。それを見るにつけても波の反對の側をひた押しに押す風の激しさ強さが思ひやられた。艦を波の方へ向ける事も得しないで、力なく漂ふ船の前まで來ると、波の山は、いきなり、礁物に襲ひかゝる猛獸のやうに思ひきり背延びをした。と思ふと、波頭は吹きつける風に反りを打つて艦と崩れこんだ。

はつと思つたその時遅く、君等はもう眞白な泡に五體を引きちぎられる程もまれながら、船

底を上にして顛覆した船體にしがみ附かうと藻掻いてゐた。見ると君の眼の届く所には、君の兄上が頭からずぶ濡れになつて、ぬる／＼と手が／＼のりない舷に手をあてがつては滑り、手をあてがつては滑りしてゐた。君は大聲を揚げて何か云つた。兄上も大聲を揚げて何か云つてゐた。然しお互に大きく口を開くのが見えるだけで、聲は少しも聞こえて来ない。

割合に小さな波が後から／＼押し寄せて来て、船を揺り上げたり押し卸したりした。その度に君達は船との縁を絶たれて、水の中に漂はねばならなかつた。而して君は、着込んだ厚皮あしの芯まで水が透つて鐵のやうに重いのもかゝはらず、一心不乱に動かす手足と同じ程の忙しさで、眼と鼻位の近さに押し逼つた死から遁れ出る道を考へた。心の上澄みは妙におど／＼とあわてゝある割合に、心の底は不思議に氣味悪く落ちついてゐた。それは君自身にすら物凄いな程だつた。空と云ひ、海と云ひ、船と云ひ、君の思案と云ひ、一つとして眼あてなく動揺しないものはない中に、君の心の底だけが照落付きに落付いて、「死にはしないぞ」とちやんと決めた。死んでゐるのが却て薄氣味悪かつた。それは「死ぬのがいやだ」「生きてゐたい」「生きる餘席のある限りは如何あつても生きなければならぬ」「死にはしないぞ」といふ本能の論理的結論であつたのだ。この恐ろしい盲目な生の事實が、而してその結論だけが、眼を見据ゑたやうに、君

の心の底に落付拂つてゐたのだつた。

君はこの物凄く無氣味な衝動に驅り立てられながら、水船なりにも顛覆した船を裏返へす努力に力を盡した。残る四人の心も君と變りはないと見えて、険しい困苦と戦ひながら、四人とも君のゐる舷の方へ集つて来た。而して申合はしたやうに、一所に力を合せて、船の胸腹に這ひ上るやうにしたので、船は一方にかしぎ始めた。

「それ今一息だぞ」

君の父上が搾り切つた生命を聲にしたやうに叫んだ。一同は又懸命な力を籠めた。

折りよく——全く折りよく、天運だ——その時船の横面に大きな波が浴びせこんで来たので、片方だけに人の重りの加はつた船はくるりと裏返つた。舷までひた／＼と水に埋もれながらも、更に角船は眞向きになつて水の面に浮び出た。船が裏返る拍子に五人は五人ながら、すつぽりと氷のやうな海の中にもぐり込みながら、急に勢ひづいて船の上に飛び上らうとした。然し、こたま着込んだ衣服は思ふさま濡れ透つてゐて、動ともすれば人々を波の中に吸ひ込まうとした。それが一方の舷に取りついて力を籠めれば又顛覆するにきまつてゐる。生死の瀬戸際にはまり込んでゐる人々の本能は恐ろしい程敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反對の舷

に廻つた。而して互に顔を見合せながら、一度にやつと聲をかけ合せて半身を舷に乗り上げた、足の方を船底に吸ひ寄せられながらも、半身を水から救ひ出した人々の顔に現はれた何んとも云へない緊張した表情——それを君は忘れる事が出来ない。次の瞬間にはわつと聲をあげて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂ふやうに笑ふか、どちらかをさうな表情——それを君は忘れる事が出来ない。

凡てかうした懸命な努力は降りしきる雪と、荒れ狂ふ水と、海面をこすつて飛ぶ雲とで表はされる自然の憤怒の中で行はれたのだ。怒つた自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間など云ふ存在は全く無視されてゐる。それにも係らず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考へにいられてはゐないのに、君達は強ひてもそれらに君達を考へさせやうとした。

舷を乗り越して奔馬のやうな波頭がつぎ／＼にすり抜けて行く、それに腰まで浸しながら、君達は船の中に取り残された得物を何んでも構はず取り上げて、それを働かしながら、死から還るべき一路を切り開かうとした。ある者は櫂を拾ひあてた。あるものは船板を、あるものは水柄杓を、あるものは長いたわしの柄を、何ものにも換へがたい武器のやうにしつかり握つて

ゐた。而して舷から身を乗り出して、子供がするやうに水を漕いだり、浸水をかき出したりした。

吹き落ちる氣配も見えない嵐は、果てもなく海上を吹きまくる。眼に見える限りは唯波頭ばかりだ。犬のやうな敏捷さで方角を嗅ぎ慣れてゐる漁夫達も、今は東西の定めやうがない。東西南北は一つの鉢の中で擦りませたやうに渾沌としてしまった。

薄い暗黒。天からともなく地からともなく湧き起る大叫喚。外には何んにもない。

「死にはしないぞ」——そんなはめになつてからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄氣味悪くこの一事を思ひつゞけた。

君の傍には一人の若い漁夫がゐたが、その右の額顚の邊から生々しい色の血が幾條にもなつて流れてゐた。それだけがはつきり君の眼に映つた。「死にはしないぞ」——それを見るにつけても君はまたしみ／＼とさう思つた。

かう云ふ必死な努力が何分續いたのか、何時間續いたのか、時間といふものゝすつかり無くなつてしまつたこの世界では少しも分らない。然しながら兎に角君が何物も納れ得ない心の中に、疲労といふ感じを覚え出して、これは困つた事になつたと思つた頃だつた、突然一人の漁

夫が意味の分らない言葉を大きな聲で叫んだのは。今までとも五人が五人ながら始終何か互に叫び續けてゐたのだつたが、この叫び聲は不思議に際立つて皆んなの耳に響いた。残る四人は思はず云ひ合はせたやうにその漁夫の方を向いて、その漁夫が眼をつけてゐる方へ視線を辿つて行つた。

船！……船！

濃い吹雪の幕のあなたに、さだかには見えないが、波の背せきに乗つて四十五度位の角度に船首を下に向けながら、帆を一ぱいに開いて、矢よりも早く走つて行く一艘の船！

それを見ると何か君の胸をどきんと下からつき上げて來た。君は思はずすゝり泣きでもしたいやうな心持ちになつた。何はさて措いても君達はその船を目懸けて助けを求めながら近寄つて行かねばならぬ等だつた。餘の人達も君と同様、確かに何物かを眼の前に認めたらしく、奇怪な叫び聲を立てた漁夫が、眼を大きく開いて見つめてゐる邊を等しく見つめてゐた。その癖一人として自分等の船をそつちの方へ向けやうとしてゐるらしい者はなかつた。それを訝がる君自身すら、心が唯わく／＼と感傷的になりまさるばかりで、急いで働かすべき手は却て萎えてしまつてゐた。

白い帆を一ぱいに開いたその船は、依然として船首を下に向けたまゝ、矢のやうに走つて行く。降りしきる吹雪を隔てた事だから、乗組みの人の數もはつきりとは見えないし、水の上に割合に高く現はれてゐる船の胴も、木の色といふよりは白堊のやうな生白さに見えてゐた。而して不思議な事には、波の腹に乗つても波の背に乗つても、舳へらは依然として下に向いたまゝである。風の強弱に應じて帆を上げ下げする様子もない。いつまでも眼の前に見えながら、四十五度位に船首を下向きにしたまゝ、矢よりも早く走つて行く。

ぎよつとして氣が付くと、その船はいつの間にか水から離れてゐた。波頭から三段も上と思はれる邊を船は傾かいだまゝ矢よりも早く走つてゐる。君の頭はかゝんとして竦み上つてしまつた。同時に船は段々大きくぼやけて行つた。何時の間にかその胴體は消えてなくなつて、唯眞白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ。と思ふ間もなくその白い大きな帆さへが、降りしきる雪の中に薄れて行つて、やがてはかき消すやうに見えなくなつてしまつた。

怒濤。白沫。さつ／＼と降りしきる雪。眼をかすめて飛び交はす雲の霧。自然の大叫喚……その眞中心まごころに頼りなく揉みさいなまれず君達の小さな水船……やつぱりそれだけだつた。

生死の間にさまよつて、疲れながらも緊張し切つた神経に起る幻ハルシネーション 覺だつたのだと氣が付くと、君は急に一種の凄氣味悪さを感じて、力を一度にもぎ取られるやうに思つた。先程奇怪な叫び聲を立てたその若い漁夫は、やがて眠るやうにおとなしく氣を失つて、ひよろひよろとよろめくと見る間に、崩れるやうに胸の間にぶつ倒れてしまつた。

漁夫達は何か魔でもさしたやうに思はず極度の不安を眼に表はして互に顔を見合せた。

「死にはしないぞ」

不思議な事にはそのぶつ倒れた男を見るにつけて、又漁夫達の不安げな容子を見るにつけて、君は驚りずまに薄氣味悪くさう思ひつゞけた。

君達がほんたうに一艘の友船と出喰はしたまでには、どれ程の時間が経つてゐたらう。然し兎に角運命は君達には無關心ではなかつたと見える。急に十倍も力を回復したやうに見えた漁夫達が、必死になつて君達の船とその船とを繋ぎ合はせ、半分が凍つてしまつた帆を形ばかりに張り上げて、風の追ふまゝに船を走らせた時には、何んとも云へない幸福な感謝の心が、抑へてもく／＼むら／＼と胸の先きこみ上げて來た。

着く處に着いてから思ひ存分の手當てをするから暫らく我慢してくれと心の中に詫びるやう

に云ひながら、君は若い漁夫を卒倒したまゝ、胸の間の片隅に抱きよせて、すぐ自分の仕事にかかつた。

やがて行手の波の上にぼんやりと雷電峠の突角が現はれ出した。山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中に揉みに揉まれながら、決して動かないものが始めて君達の前に現はれたのだ。それを見付けた時の漁夫達の心の勇み……魚が水に遇つたやうな、野獸が山に放たれたやうな、太陽が西を見付け出したやうなその喜び……船の中の人達は思はず足爪立てんげかに總立ちになつた。人々の心までが總立ちになつた。

「峠が見えたぞ……北に取れや舵を……隠れ岩さ乗り上げんな……雪崩ユタカにも打たせんなよう……」

さうさう聲がてん／＼に人々の口から喚かれた。それにしても船はひどく流されてゐたものだ。雷電峠からは五里も離れた瀬にゐたものが、何時の間にかこんな處に來てゐるのだ。見る見る風と波とに押しやられて船は吸ひ付けられるやうに、吹雪の間から眞黒に天までそゞり立つ斷崖に近寄つて行くのを、漁夫達はさうはさせまいと、帆をたて直し、櫂を押し、横波を喰はせながら船を北へと向けて行つた。

陸地に近づくと波はたほ怒る。鬣を風に靡かして暴れる野馬のやうに、波頭は波の穂になり、

波の穂は飛沫になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまた眞白い波になつて、息もつかせず後から後からと山裾に襲ひかゝつて行く。山裾の岩壁に打ちつけた波は、沸えくりかへつた熱湯をぶちつけたやうに、湯氣のやうな白沫を五丈も六丈も高く飛ばして、反りを打ちながら海の中にどつと崩れ込む。

その猛烈な力を感じてか、斷崖の出鼻に降り積つて、徐々に斜面を下り下つて來てゐた積雪が、地面との縁から離れて、すさまじい地響と共に、何百丈の高さから一氣になだれ落ちる。巖を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。それが見る／＼大きさを増して、隕星のやうに白い尾を長く引きながら、音も立てずに轟地に落ちて來る。あなやと思ふ間にそれは何十間にも互る水晶の大簾だ。ど、ど、どどどしーん……さあーつ……。廣い海面が眼の前で眞白な平野になる。山のやうな五百重の大波は忽ち逐ひ退けられて漣一つ立たない。どつとそこを目懸けて狂風が四方から吹き起る……その物すさまじさ。

君達の船は悪鬼に逐ひ迫られたやうにおびえながら、懸命に東北へと舵を取る。磁石のやうな陸地の吸引力からやう／＼自由になる事の出來た船は、また揺れ動く波の山と戦はねばならぬ。

それでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりしめると、漁夫達の力は急に五倍にも十倍にもなつた。今までの人数の二倍も乗つてゐるやうに船は動いた。岸から打上げる目標の烽火が紫だつて暗黒な空の中でばつと弾けると、撃々として火花を散らしながら闇の中に消えて行く。それを目懸けて漁夫達はある限りの櫓をこつたまゝでひた漕ぎに漕いだ。その不思議な沈黙が、互に呼び交はす惨らしい叫び聲よりも却て力強く人々の胸に響いた。

船が波の上に乗つた時には、波打際を集つて何か騒ぎ立てゝゐる群衆が見やられるまでになつた。やがて嵐の間にも大砲のやうな音が船まで聞こえて來た。と思ふと救助繩が空をかける蛇のやうに曲りくねりながら、船から二三段距つた水の中にざぶりと落ちた。漁夫達はその方へ船を向けやうとひしめいた。第二の爆聲が聞こえた。繩は誤らず船に届いた。

二三人の漁夫がよろけながらその繩の方へ駆け寄つた。音は聞こえずに烽火の火花は間を置いて怪火のやうに遙かの空にばつと咲いてはすぐ散つて行く。船は繩に引かれてぐん／＼陸の方へ近寄つて行く。水底が淺くなつた爲めに無二無三に亂れて立騒ぐ波濤の中を、互にしつかりしがみ合つた二艘の船は、半分がた水の中を漕りながら、半死の有様で進んで行つた。

君は始めて気が付いたやうに年老いた君の父上の方を振り返つて見た。父上は膝から下を水に浸して船座に坐つたまゝ、じつと君を見詰めてゐた。今まで絶えず君と君の兄上とを見詰めてゐたのだ。さう思ふと君は何んとも云へない骨肉の愛着にきびしく捕へられてしまつた。君の眼には不覺にも熱い涙が浮んで來た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かつてよござんした」

「お前が助かつてよかつた」

二人の眼は咄嗟の間にも互に親しみを籠めてかう云ひ合つた。而してこの嬉しい言葉を語る眼から互々の眼は離れやうとしなかつた。さうしたまゝで暫らく過ぎた。

君は満足し切つて又働き始めた。もう眼の前には岩内の町が、汚く貧しいながらに、君に取つてはなつかしい岩内の町が、新しく生れ出たまゝのやうに立ち列つてゐた。水難救済會の制服を着た、達が、右往左往に所々廻る有様もまぎ／＼と眼に映つた。

何とも云へない勇ましい新しい力——上湖のやうに、腹のどん底からむら／＼と湧き出して來る新しい力を感じて、君は「さあ來い」と云はんばかりに、櫓をひしげる程押し擱んだ。而して矢聲をかけながら漕ぎ始めて。涙が後から／＼と君の頬を傳つて流れた。

啞のやうに今まで黙つてゐた外の漁夫達の口からも、矢庭に勇ましい懸聲が溢れ出て君の聲に應じた。櫓は梭のやうに波を切り破つて激しく働いた。

岸の人達が呼びおこす聲が君達の耳にも這入るまでになつた。と思ふと君は段々夢の中に引き込まれるやうなぼんやりとした感じに襲はれて來た。

君はもう一度君の父上の方を見た。父上は船座に坐つてゐる。然しその姿は前のやうに君に何等の逼つた感じを惹起させなかつた。

やがて船底にぢやり／＼と砂の觸れる音が傳はつた。船は滞りなく君が生れ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかつたぞ」

と君は思つた。同時に君の眼の前は見る／＼眞暗になつた。……君はその後を知らない。

七

君は漁夫達と膝をならべて、同じ握り飯を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のやうに距つてこんなことを想ひ出す。何と云ふ眞剣な而して險しい漁夫の生活だらう。人間と云ふも

のは、生きる爲めには、厭やでも死の側近くまで行かなければならないのだ。謂はゞ捨身になつて、こつちから死に近づいて、死の油断を見すまして、かつばらひのやうに生の一片をひつたくつて逃げて來なければならぬのだ。死は知らんふりをしてそれを見やつてゐる。人間は奪ひ取つて來た生をたしなみながらしやぶるけれども、程なくその生はまた盡きて行く。さうすると又死の眼の色を見すまして、死の方に偷み足で近寄つて行く。ある者は死が餘り無頓着さうに見えるので、遂氣を許して少し大膽に高慢に振舞はうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはゐない。ある者は年と共に意氣地がなくなつて行つて、死の姿がいよいよ恐ろしく眼に映り始める。而してそれに近寄る冒險を躊躇する。さうすると死はやをら物憂げな腰を上げて、そろ／＼とその人に近寄つて來る。ガラ／＼蛇に見こまれた小鳥のやうに、その人は逃げも得しないですくんでしまふ。次ぎの瞬間にその人はもう地の上にはゐない。人の生きて行く姿はそんな風にも思ひなされる。實に果敢ないとも何んとも云ひやうがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼等は死に對して喧嘩をしかけんばかりの切羽つまつた心持ちで出縣けて行く。陸の上では何んと云つても偽善も彌縫もある程度までは通用する。ある意味では必要であるときさへも考へられる。海の上ではそんな事は藥の足しにしたくもない。眞裸か

な實力と天運ばかりが凡ての漁夫の頼みどころだ。その生活はほんとに悲壯だ。彼等がそれを意識せず、生きると云ふ事は凡てかうしたものと諦めをつけて疑ひもせず、不平も云はず、自分の爲めに、自分の養はなければならぬ親や妻や子の爲めに、毎日々々板子一枚の下は地獄のやうな境界に身を放^なげ出して、せつせと骨身を惜まず働く姿はほんたうに悲壯だ。而して惨めだ。何んだつて人間と云ふものはこんなしがない苦勞をして生きて行かなければならないのだらう。

世の中には、殊に君が少年時代を過ごした都會といふ所には、毎日々々安逸な生を食傷する程貪つて一生夢のやうに送つてゐる人もある。都會とは云ふまい。段々とさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百萬圓の富を祖先から受嗣いで、小樽には立派な別宅を構へてそこに妻を住はせ、自分は東京のある高等な學校を兎も角も卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えない癖に、一年中是れと云つてする仕事もなく、退屈をまぎらす爲めの行樂に身を任せ、それでも使ひ切れない精力の餘剰を富者の贅澤の一つである癩癩に漏らしてゐるのがある。君はその男をよく知つてゐる。小學校時代には教室まで一つだつたのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二人の生活は恐ろしく懸け隔つてしまつたのだ。君はそんな人達を一度でも羨

ましいと思つた事はない。その人達の生活の内容の空しさや想像する十分の力を君は持つてゐる。而して彼等が彼等の導くやうな生活をするのは道理があると合點がゆく。金があつて才能が平凡だつたら勢ひあゝして僅かに生の倦怠から遁れる外はあるまいと密かに同情さへされぬではない。その人達が生に飽滿して暮すのはそれでいゝ、然し君の周圍にゐる人達が何故あんな恐ろしい生死の境の中から生きる事を憐憐しなければならぬ運命にあるのだらう。何故彼等はそんな境遇——死ぬ瞬間まで一分の隙を見せずに身構へてゐなければならぬやうな境遇にゐながら、何故生きやうとしなければならぬのだらう。これは君に不思議な謎のやうな心地を起させる。ほんたうに生は死よりも不思議だ。

その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云はなければならぬ。然し君自身の不幸に比べて見ると、遙かに幸福だと君は思ひ入るのだ。彼等には兎に角さう云ふ生活をする事がそのまま生きる事なのだ。彼等は奇麗さ、つばりと諦めをつけて、さういふ生活の中に頭からはまり込んでゐる。少しも疑つてはゐない。それなのに君は絶えずいら／＼して、目前の生活を疑ひ、それに安住する事が出来ないでゐる。君は喜んで君の両親の爲めに、君の家の苦しい生活の爲めに、君の頑丈な力強い肉體と精力とを提供してゐる。君の父上の假初めの風邪が癒つて、

暫らくぶりで一緒に漁に出て、夕方になつて家に歸つて來てから、一家が睦まじくちやぶ臺のまはりを圍んで、暗い五燭の電燈の下で箸を取上げる時、父上が珍らしく木彫のやうな固い顔に微笑を湛へて、

「今夜ははおまんまが甘えぞ」

と云つて、飯茶碗を一寸押したよくやうに眼八分に持ち上げるのを見る時などは、君は何んと云つても心から幸福を感じずにはゐられない。君は目前の生活を決して悔んでゐる譯ではないのだ。それにも係らず、君は何かにつけてすぐ暗い心になつてしまふ。

「畫が描きたい」

君は寝ても起きてても祈りのやうにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかき抱いてゐるのだ。その望みをふり捨て、仕舞へる事なら世の中は簡單なのだ。

戀——互に思ひ合つた戀と云つてもこれ程の執着はあり得まいと君は自身の心を哀れみ悲しみながらつく／＼と思ふ事がある。君の厚い胸の奥からは深い溜息が漏れる。

雨の日などに土間に坐りこんで、兄上や妹さんなぞと一緒に、配繩の繕ひをしたりしてゐると、どうかした拍子に皆んなが仕事に夢中になつて、睦まじく交はしてゐた世間話すら途絶え

さして、黙りこんで手先きばかりを忙はしく働かすやうな時がある。かういふ瞬間に、君は我れにもなく手を休めて、茫然と夢でも見るやうに、君の見て置いた山の景色を思ひ出してゐる事がある。この山とあの山との距りの感じは、只の線をかう云ふ曲線で力強く描きさへすれば、屹度いゝに違ひない、そんな事を一心に思ひ込んでしまふ。而して鉄を持った手の先きで、自然に、想像した曲線を膝の上に筆度も描いては消し、描いては消しよてゐる。

又ある時は沖に出て、配繩をたぐり上げる大事な忙はしい時に、君は板子の上に坐つて、二本ならべて立てられたビール瓶の間から繩をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛が瓶にせかれゝる爲めに、針の縁を離れて胴の間にびち／＼跳ねながら落ちて行くのをじつと見やつてゐる。而してクリムソンソーキを水に薄く溶かしたよりもつと鮮明な光を持った鱗の色に吸ひつけられて、思はずぼんやりと手の働きをやめてしまふ。

これらの場合はつと我れに返つた瞬間ほど君を惨めにするものはない。居睡りしたのを見付けられでもしたやうに、君はきよとんと恥しさうにあたりを見廻して見る。ある時は兄上や妹さんが暗まつて行く夕方の光に、なほ氣ぜはしく眼を繩によせて、せつせとほづれを解いたり、切れ目をつないだりしてゐる。ある時は漁夫達が、寒さに手を海老のやうに赤くへし曲げなが

ら、息せき切つて配繩をたくし上げてゐる。君は子供のやうに思はず許まで赤面する。

「何んといふだらしのない二重生活だ。俺れは一體俺れに與へられた運命の生活に男らしく服従する覺悟であるんぢやないか。それだのにまだ小つぽけな才能に未練を残して、柄にもない野心を捨てかねてゐると見える。俺れはどつちの生活にも眞劍にはなれないのだ。俺れの畫に對する熱心だけから云ふと、畫かきになるためには十分過ぎる程なのだ、それだけの才能があるかどうかと云ふ事になると判断のしやうが無くなる。勿論俺れに畫の描き方を教へてくれた人もなければ、俺れの畫を見てくれる人もない。岩内の町でのたつた一人の話相手のKは、俺れの畫を見る度に感心してくれる。而してどんな苦しみを經ても畫かきになれと勧めてくれる。然しKは第一俺れの友達だし、第二に畫が俺れ以上に判るとは思はれぬ。Kの言葉は何時でも俺れを勵まし鞭つてくれる。然し俺れは何時でもその後ろに自惚れさせられてゐるのではないかといふ疑ひを持たずにはゐない。如何すればこの二重生活を突き抜ける事が出来るのだらう。生れから云つても、今までの運命から云つても、俺れは漁夫で一生を終へるのが相當してゐるらしい。Kもあの氣むづかしい父の下で調劑師で一生を送る決心を悲しくもしてしまつたらしい。俺れから見るとKこそは立派な文藝者になれさうな男だ

けれども、Kは誇張なく自分の運命を諦めてゐる。悲しくも諦めてゐる。待てよ、悲しいと云ふのはほんたうはKの事ではない。さう思つてゐる俺れ自身の事だ。俺れはほんたうに悲しい男だ。親父にも濟まない。兄や妹にも濟まない。この一生をどんな風に過したら、俺れはほんたうに俺れらしい生き方が出来るのだらう」

そこに居ならんだ漁夫達の間に、どつしりと男らしい頭丈な胡坐を組みながら、君は彼等とは全く異邦の人のやうな淋しい心持ちになつてこんな事を思ひつゞける。

やがて漁夫達はそこらを片付けてやをら立ち上ると、胴の間に降り積んだ雪を掴んで、手の平で擦り合せて、指に粘りついた飯粒を落した。而して配繩の引き上げにかゝつた。

西に春き出すと日脚はどん／＼歩みを早める。おまけに上の方からたるみなく吹き落して來る風に、海面は妙に弾力を持った風ぎ方をして、その上を霰まじりの粉雪がさ／＼と來ては過ぎ、過ぎては來る、君達は手袋を脱ぎ去つた手を眞赤にしながら、氷點以下の水でぐ／＼より濡れた配繩をその一端からたぐり上げ始める。三間四間開き位に、眼の下二尺もあるやうな鰹がびち／＼跳ねながら引き上げられて來る。

三十町にも餘る位な配繩を全然たくしこんでしまふ頃には、海の上は少し墨汁を加へた牛乳

のやうにぼんやり暮れ残つて、そこらに眺めやられる漁船のあるものは、帆を張り上げて港を目指してゐたり、あるものは淋しいかけ聲をなほ海の上に響かせて、忙はしく配繩を上げてゐるものもある。夕暮れに海上に點々と浮んだ小船を見渡すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がその果敢ない末梢を淋しくさらしてゐるのだ。

君達の船は、海風が風ぎて陸風に變らない中にと帆を立て、櫓を押して陸地を目懸ける。晴れては曇る雪時雨の間に、岩内の後ろに聳える山々が、高いのから先きに、水平線上に現はれ出る。船歌を唄ひつれながら、漁夫達は見慣れた山々の頂きを繋ぎ合せて、港のありかをそれと離ろげながら見定める。そこには妻や母や娘等が、寒い濱風に吹きさらされながら、噂取り取りに江に立つて君達の歸りを待ち侘びてゐるのだ。

是れも牛乳のやうな色の寒い夕靄に包まれた雷電岬の突角がいかつく大きく見え出すと、防波堤の突先きにある燈臺の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それをみると、君と云はず人々の胸の中には、今日も先づ命は無事だつたといふ底深い喜びがひとりで湧き出して來て、陸に對する不甲議なノスタルヂヤが感ぜられる。漁夫達の船歌は一段と勇ましくなつて、君の父上は船の艦に漁獲を知らせる旗を掲げる。その旗がぱ／＼と風

に煽られて音を立てる——その音がいゝ。

段々間近かになつた岩内の町は、黄色い街燈の灯の外には、まだ燈火もともさず黒く淋しく横はつてゐる。雪のむら消えた砂濱には、今朝と同様に女達が彼所此所にいくつかの固い群れになつて、石ころのやうにこちんと立つてゐる。白波がかすかな潮の香と音をたて、その足許に行つては消え、行つては消えするのが見え渡る。

帆が卸ろされた。船は海岸近くの波に激く動揺しながら、艦を海岸の方に向けかへて段々と汀に近寄つて行く。海産物會社の印絆繩を着たり、犬の皮か何かを裏につけた外套を深々と羽織つたりした男達が、右往左往に走りまはるその邊を目がけて、君の兄上が手慣れたさばきで、ざつと友誼を投げると、それがすぐ幾十人もの男女の手で引張られる。船は頻りと上下する軸に波のしぶきを喰ひながら、どん／＼砂濱に近寄つて、やがて疲れ切つた魚のやうに黒く横はつて動かなくなる。

漁夫達は櫓や舵や帆の始末を簡單にしてしまふと、舷を傳はつて陸に跳り上がる。海産物製造會社の人夫達は、漁夫達と入れ交つて船の中に猿のやうに飛び込んで行く。而してまだ死に切らない餌の尾をつかんで、磯のやうに砂の上に投げ出す。濱に待ち構へてゐる男達は、眼に

もとまらない早業で數を數へながら、魚を畚の中にとまき込む。漁夫達は吉例のやうに社の數取人に對して何かと故障を云ひたて、わめく。一日ひつそりかんとしてみた濱も、この暫らくの間だけは、さすがに賑やかな氣分になる。景氣にまき込まれて、女達のある者まで男と一緒にになつて喧嘩腰に物を云ひつゝのる。

然しこの華々しい賑はひも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの險しい一日の勞働の結果は、僅か十數分の間で他愛もなく會社の人達に處分されてしまふのだ。君が君の妹を女達の群れの中から貝付け出して、忙はしく眼を見交はし、言葉を交はす暇もなく、濱の上には亂暴に踏み荒らされた砂と、海藻と小魚とが砂まみれになつて残つてゐるばかりだ。而して會社の人夫達は後を見ずに又他の漁船の方へ走つて行く。

からして岩内中の漁夫達が一生懸命に捕獲して來た魚は瞬く中にさらはれてしまつて、墨のやうに煙突から煙を吐く怪物のやうな會社の製造所へと運ばれて行く。

夕焼けもなく日はとつぷりと昇れて、雪は紫に、灯は光なくなると赤くばかり見える初夜に。君達はへ朝の通りに幾かたまりかの黒い影になつて、疲れ切つた五體を銘々の家路に運んで行く。寒氣の爲めに五臟まで締めつけられたやうな君達は口をきくのさへ物怖くして出來ない。

女達かはしやいだ調子で、その日の中に陸の上で起つた色々な出来事——色々な出来事と云つても、際立つて珍らしい事や面白い事は一つもない——を話し立てるのを、ぶつたり押黙つたまゝで聞きながら歩く。然しそれが何んといふ快さだらう。

然し君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引續いて君の家に起つた種々な不幸がさせる業だ。永病ひの後に良人に先立つた君の母上に始まつて、君の家族の周囲には妙に死と云ふものが執念くつき纏つてゐるやうに見えた。君の兄上の初生児も取られてゐた。汗水が凝り固つて出来たやうな銀行の貯金は、その銀行が不景氣のあほり食つて破産した爲めに、水の泡になつてしまつた。命とかけがへの漁場が、間違つた防波堤の設計の爲めに、全然役に立たなくなつたのは前にも云つた通りだ。耐へ性のない人々の寄集りなら、身代が朽木のやうにがつくりと折れ倒れるのはありがちと云はなければならぬ。唯君の家では、父上と云ひ、兄上と云ひ、根性骨の強い正直な人達だったので、凡ての激しい運命を眞正面から受け取つて、骨身を惜まらず働いてゐたから、曲つたなりに今日々々を事候かずに過してゐるのだ。然し君の家を襲つたやうな運命の壓迫はそこいら中に起つてゐた。軒を並べて住みなしてゐると、どこの家にもそれ相當な生計が立てられてゐるやうだけれども、一

軒々に立ち入つて見ると、この頃の岩内の町には鼻を酸くしななければならぬやうな事がそこいら中にまくしあがつてゐた。ある家は眼に立つて零落してゐた。嵐に吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのまゝで雨の漏れるに任せた所も尠くない。眼鼻立ちの揃つた年頃の娘が、嫁入つたといふ噂もなく姿を消してしまふ家もあつた。立派に家框いへかまちが立ち直つたと思ふと、その家は代が替つたりしてゐた。そろ／＼と地の中に引きこまれて行くやうな薄氣味しい零落の兆候が町全體に何所となく漂つてゐるのだ。

人々は暗々裡にそれに脅かされてゐる。何時どんな事がまくし上るかも知れない——さういふ不安は絶えず君達の心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出さないまでも頼焼の災難に遇ふとか、持船が沈んでしまふとか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鯀くまの群衆ぐんしゆがすつかり外れるとか、ワケ船が流されるとか、色々に想像されるこれ等の不幸の一つだけに出會はしても、君の家に取つては足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五體を家路に運びながら、而して馬鹿に建物の大きな割合に、それにふさはない暗い灯でそこと知られる柁葺きの君の生れた家屋を眼の前に見やりながら、君の心は運命に對する疑ひの爲めに妙におくれ勝ちになる。

それでも闕を踏ぐと土間の罫の竈には火が暖い光を放つて水飴のやうに軟かく撓ひながら燃えてゐる。どこからどこまで眞黒に煤けながら、だゞつ廣い圍爐裡の間はきちんと片付けてあつて、居心よささうにしつらへてある。嫂や妹の心づくしを君はすぐ感じてうれしく思ひながら、持つて歸つた漁具——寒さの爲めに凍り果て、觸れ合へば石のやうに音を立てる——をそれ／＼の所に始末すると、是れもから／＼と音を立てる程凍り果てた仕事着を一枚々々脱いで、竈のあたりに懸けつらねて、普段着に着かへる。一日の寒氣に凍え切つた肉體はすぐ熱を吹き出して、顔などはほせ上る程ぼか／＼して来る。普段着の軽い暖かさ、一碗の熱湯の味のよさ。

小氣味よい程したゝか夕餉を食つた漁夫達が、

「親方さんお休み」

と挨拶してぞろ／＼出て行つた後には、水入らずの家族五人が、圍爐裡の火に眞赤に顔を照らし合ひながらさし向ひになる。戸外ではさら／＼と音を立て、霞まじりの雪が降りつゞけてゐる。七時といふのにもうその界限は夜更け同様だ。どこの家もしんとして赤子の啼く聲が時折り聞こえるばかりだ。唯遠くの遊廓の方から、朝寢の出来る人達が寄集つてゐるらしい酔狂

のさゞめきだけが途切れ／＼に風に送られて傳はつて来る。

「俺らはあ寝まるぞ」

僅かな睡酌に晝間の疲勞を存分に發して、眼をとろんこにした君の父上が、まづ圍爐裡の側に床をとらして横になる。やがて兄上と嫂とが次ぎの部屋に退くと、圍爐裡の側には、君と君の妹だけが寝るのだ。

時が静かに淋しく、然し睦まじくじり／＼と過ぎて行く。

「寢ずに」

針の手をやめて、君の妹はおとなしく顔を上げながら君に云ふ。

「先きに寢れ、いゝから」

胡坐の膝の上にスケッチ帖を擲げて、と見かう見してゐる君は、振り向きもせず、ぶつぶつらばうにさう答へる。

「朝げに又眠むいとつてこづき起されべえに」につと片頬に笑みを湛へて妹は君に悪戯らしい眼を向ける。

「何んの」

「何んのでねえよ、そんたもの見こくつて何んのだしになるべえさ。皆んなよつて笑つとるでねえか、今の兄さんこと暇さへあれば見つたくもない晝べえ描いて、何んするだべつて」

君は思はず顔を上げる。

「誰が云つた」

「誰つて……皆んな云つてるだよ」

「お前もか」

「私は云はねえ」

「さうだべさ。それならそれでいゝでねえか。譯のわかんねえ奴さ何んとでも云はせておけばいゝだ。これを見たか」

「見たよ。……莊園の裏から見た所だなあそれは。山は私氣わじに入つたども、雲が黒過ぎるでねえか」

「差出口はおけやい」

而して君達二人は顔を見合つて溶けるやうに笑み交はす。寒さはしん／＼と脊骨まで徹つて、戶外には風の落ちた空を黙つて雪が降り積んでゐるらしい。

今度は君が發意する。

「おい寝べえ」

「兄さん先きに寝なよ」

「お前寝べし……明日又一番に起るだから……戸締りは俺らがするに」

二人はわざと意趣に争つてから、妹はとう／＼先きに寝る事にする。君はなほ半時間ほどスケッチに見入つて居たが、寒さに堪へ切れなくなつてやがて身を起すと、藁草履を引かけて土間に降り立ち、籠の火許を十分に見届け、漁具の整頓を一わたり注意し、入口の戸に錠前を卸ろし、雪の吹きこまぬやう窓の隙間をしつかりと閉ぢ、而して又圍爐裡座に歸つて見ると、ちよろ／＼と燃えかすれた根粗朶の火に腫ろに照らされて、君の父上と妹とが爐縁の二方に寝くまつてゐるのが物淋しく眺められる。一日々々生命から遠ざかつて行く老人と、若々しい生命の力に惱まされてゐるとさへ見える妹との形顔は、明滅する焰の前に幻のやうな不思議な姿を描き出す。この老人の老先きをどんな運命が待つてゐるのだらう。この處女の行末をどんな運命が待つてゐるのだらう。未來は凡て暗い。そこではどんな事でも起り得る。君は二人の寝顔を見つめながらつく／＼とさう思つた。さう思ふにつけて、その人達の行末については、素直

な心で幸あれかしと祈る外はなかつた。人の力と云ふものがこんな嚴肅な瞬間には一番便りなく思はれる。

君はスケッチ帖を枕許に引きよせて、垢染みた床の中にそのまゝもぐり込みながら、氷のやうな蒲團の冷たさが體の温みで暖まるまで、まぢ／＼と眼を見開いて、君の妹の寝顔を、隣れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持ちで眺めつゞける。それは君が妹に對して幼少の時から何かの折りに必ず抱くなつかしい感情だつた。

それもやがて疲勞の夢が押し包む。

今岩内の町に目覺めてゐるものは、恐らく朝霧坊の出来る富んだ倚け者と、幣裏守と大位のものだらう。夜は寒く淋しく更けて行く。

八

君。君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文學者であると云ふ事から許してくれるだらうか。私の想像は後から後からと引續いて湧いて来る。それが中つてゐるやうが中つてゐまいが、君は私がかうして筆取るその目論見に異意のない事だけは信じてくれるだらう。而して無邪氣

な微笑を以て、私の唯一の生命である空想が勝手次第に育つて行くのを見守つてゐてくれるだらう。私はそれに頼つて更に書き續けて行く。

鯉の漁期——それは北方に住む人の胸にのみしみ／＼と感ぜられるなつかしい季節の一つだ。この季節になると長く地の上を領してゐた冬が老いる。——北風も、雪も、圍爐裡も、綿入れも、雪鞋も、等しく老いる。一片の雪のたゞずまひにも、自然の目論見と豫言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫達の眼には、朝夕の空の模様が春めいて來た事をまざ／＼と思はせる。北西の風が東に廻るにつれて、單色に堅く凍りついてゐた雲が、蒸されるやうにもや／＼と崩れ出して、淡いながら暖い色の晴雲に變つて行く。朝から風もなく晴れ渡つた午後などに波打際に出て見ると、稍綠色を帯びた青空の遙か遠くの地平線高く、幔幕を眞一文字に張つたやうな雪雲の堆積に日が射して、薫温なく薔薇色に輝いてゐる。何んと云ふ美妙的な美しい色だ。冬はあすこまで遠退いて行つたのだ。さう思ふと、不幸を突き抜けて幸福に出遇つた人のみを感じ、あの過去に對する寛大な思ひ出が、ゆるやかに濱に立つ人の胸に流れこむ。五ヶ月の長い嚴冬を牛のやうに忍耐強く辛棒しぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさへなり兼ねた北人の心に、春の約束がほの／＼と恵み深く響き始める。

朝晩の凍み方は大して多と變りはない。濡れた金物がべた／＼と糊のやうに指先きに粘りつく事は珍らしくない。けれども日が高くなると、さすがに何所か寒さにひびがある。河邊は急に景氣づいて、納屋の中からは大釜や締め櫃が擔ぎ出され、ホック船やワク船をつとのやうに蔽うてゐた席が取りのけられ、旅鳥と一緒に集つて來た漁夫達が、綾を織るやうに雪の解けた砂河を行き違つて目まぐるしい活氣を見せ始める。

蟹の漁獲が一先づ終つて、鯨の先驅もまだ群來て來ない。海に出て働く人達はこの間に少しの間息をつく暇を見出すのだ。冬の間から一心に覗つてゐたこの暇に、君はある日朝からふいと家を出る。勿論懐ろの中には手馴れたスケッチ帖と一本の鉛筆とを潜まして。

家を出ると往來には漁夫達や、女でめん(女労働者)や、海産物の仲買ひと云つたやうな人々が賑やかに浮き／＼して往つたり來つたりしてゐる。根雪が氷のやうに磐になつて、その上を雪解の水が、一冬の塵埃に染まつて、泥炭地の湧き水のやうな色でどぶ／＼と漂つてゐる。馬籠に材木のやうに大きな生々しい薪をしこたま積み乗せて、その照路を引ばつて來た一人の年配な内儀さんは、君を認めると、引綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな聲をかける。

「はれ兄さんもう濱さ行くだね」

「うんにや」

「濱で無え？ たら又山かい。魚を商賣にする人が暇さへあれば山さつぱしるのだがら怪體だあてばさ。いゝ人でもゐるだんべさ。は、は、は、……。うんすら妬いてこすに、一押し手を貸すもんだよ」

「口はどつたい事べ云ふと鯨様が群來てはくんねえぞ。をかした婆様よなあお前も」

「婆様だ！ 人聞きの悪い事べ云はねえもんだ。人様が笑ふでねえか」

實際この内儀さんの噪いだ雑言には往來の人達が面白がつて笑つてゐる。君は當惑して、橋の後に廻つて三四間ぐん／＼押してやらなければならなかつた。

「そだ。そだ。兄さんいゝ力だ。濱まで押してくれたら已らお前に惚れてこすに」

君は呆れて霧から離れて逃げるやうに行手を急ぐ。面白がつて二人の間答を聞いてゐた群集は思はず一度にとつと笑ひ崩れる。人々のその高笑ひの際にまじつて、内儀さんがまた誰かに話しかける大聲がのびやかに聞こえて來る。

「春が來るのだ」

君は何につけても好意に満ちた心持ちでこの人達を思ひやる。

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬中空屋になつてゐた西洋風の二階建の雨戸が緑り開けられて、札幌のある大きなデパートメント・ストアの臨時出店が開かれやうとしてゐる。薬罈や新聞紙のはみ出た大きな木箱が幾個か店先きに放り出されて、廣告のけばけばしい色旗が、活動小屋の前のやうに立て列べてある。而して氣の利いた手代が十人近くも忙しさに働いてゐる。君はこの大きな臨時の店が、岩内中の小賣商人にどれ程の打撃であるかを考へながら、自分達の漁獲が、資本のない爲めに、外の土地から投資された海産製造会社によつて捨て値で買ひ取られる無念さをも思はないではゐられなかつた。「大きな手には搦まれる」……さう思ひながら君はその店の角を曲つて割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の薬種店があつて、それにつゞいて小さな調劑所がしつらへてあつた。君はそのガラス窓から中を覗いて見る。ずらつと列べた薬種瓶の下の調劑卓の前に、凭れのない袂拔きの事務椅子に腰かけて、黒い事務マントを羽織つた慇懃さうな小柄な若い男が、一心に小形の書物に読み耽つてゐる。それはKと云つて、君が岩内の町に持つてゐる唯一人の心の方だ。君はくすんだ硝子板に指先きを持つて行つてほと／＼と敲く。Kは機

敏に書物から眼を擧げてこちらを振りかへる。而して驚いたやうに座を立つて来て硝子障子を開ける。

「何所に」

君は黙つたまゝ懐中からスケッチ帖を取出して見せる。而して二人は互を理解するやうに微笑みかはす。

「君は今日は出られまい」

君は東京の遊學時代を記念する爲めに、大事にとつて置いた書生の言葉を使へるのが、この友達に會ふ時の一つの楽しみだつた。

「駄目だ。この頃は漁夫で岩内の人數が急に殖えたせゐるか忙はしい。然し今日はまだ寒いだらう。手が自由に動くまい」

「何、畫は描けずとも山を見てみればそれでいゝだ。久しく出て見ないから」

「僕は今これを読んでゐたがへと云つてKはミケランジェロの書翰集を君の眼の前にさし出して見せた。素晴らしいもんだ。かうしてゐてはいけないやうな氣がするよ。だけれども迎も及びもつかない。いゝ加減な藝術家と云ふものになつて納つてゐるより、この薄暗い薬局で、

黙りこくつて一生を送る方が矢張り僕には似合はしいやうだ」

さう云つて君の友は、悵鬱な小柄な顔を一際悵鬱にした。君は勵ます言葉も慰める言葉も知らなかつた。而して心尤めするものやうにスケッチ帖を懐ろに納めてしまつた。

「ぢや行つて来るよ」

「さうかい。そんなら歸りには寄つて話して行き給へ」

この言葉を取り交はして、君はその濼汚れたガラス窓から離れる。

南へ／＼と道を取つて行くと、節婦橋と云ふ小さな木橋があつて、それから先きにはもう家並は續いてゐない。溝泥を担ね返したやうな雪道は段々奇麗になつて行つて、地面に近い所が水になつてしまつた積雪の中に、君の古い兵隊長靴はやゝともするとずぼり／＼と踏み込んだ。

雪に蔽はれた野は雷電峠の麓の方へ爪先上りに擴がつて、折から晴れ氣味になつた雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を銀と藍とでくつきりと彩つてゐる。寒い空氣の中に、雪の照り返しがくつきりと顔を火照らせる程強く射して来る。君の顔は見る／＼雪焼けがして眞赤に汗ばんで来た。今まで頭丈に被つてゐた頭巾をはねのけると、眼界は急に遙々と擴がつて見える。

何んと云ふ宏大な嚴かな景色だ。贈振の分水嶺から分れて西南を指す一連の山波が、地平か

ら力強く伸び上つて段々高くなりながら、岩内の南方へ走つて来ると、そこに圖らずも陸の果てがあつたので、突然水際に走りよつた奔馬が、揃へた前脚を踏み立て、思はず平頸を高く聳かしたやうに、山は急にそゞり立つて、沸騰せんばかりに天を摩してゐる。今にもすさまじい響きを立て、崩れ落ちさうに見えながら、何百萬年か何千萬年か、昔のまゝの姿でそゞり立つてゐる。而して今は唯一色の白さに雪で被はれてゐる。而して雲が空を動く度毎に、山は居住ひを直したかのやうに姿を變へる。君は久振りて近々とその山を眺めるともう有頂天になつた。而して餘の事は奇麗に忘れてしまふ。

君は唯一圖にがむしやりに本道から道のない積雪の中に足を踏み入れる。行手に黒ずんで見える楡の切株の所まで腰から下まで雪に塗れて辿り着くと、君はそれに兵隊長靴を打ちつけて脚の雪を拂ひ落しながら佇む。而して眼を据ゑてもう一度雪野の果てに聳え立つ雷電峠を物珍らしく眺めて、魅入られたやうに茫然となつてしまふ。幾度見ても倦きる事のない山のたゞずまひが、この前見た時と相違のある筈はないのに、全く異つた表情を以て君の眼に映つて来る。

この前見に来た時は、それは嚴冬の一日のことだつた。矢張り今日と同じ處に立つて、凍える手に鉛筆を運ぶ事も出来ず、黙つたまゝ立つて見てゐたのだつたが、その時の山は地面から靜

静と盛上つて、雪雲に閉された空を確かと掴んでゐるやうに見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだつた。君はその前に立つて押しひしやげられるやうな威壓を感じた。今日見る山はもつと素直な大きさと豊かさを以て静かに君を掻き抱くやうに見えた。普段自分の心持ちが誰からも理解されないで、一種の變屈人のやうに人々から取扱はれてゐた君には、此自然が君に對して求めて来る親しみはしみと似たものだつた。君はまた更に眼を擧げて、なつかしい友に向ふやうにしみとと山の姿を眺めやつた。

丁度親しい心と心とが出遇つた時に、互に感ぜられるやうな温かい涙ぐましさか、君の雄々しい胸の中に湧き上つて來た。自然は生きてゐる。而して人間以上に強く高い感情を持つてゐる。君には同じ人間の語る言葉だが英語は解らない。自然の語る言葉は英語よりも遙かに君には解りいゝ。ある時には君が使つてゐる日本語そのものよりもつと感觸の表現の豊かな平明な言葉で自然か君に話しかける。君はこの涙ぐましい心持ちを描いて見やうとした。

そして懐中からいつものスケッチ帖を取出して切株の上に置いた。開かれた手帳と山とをかたみかばかりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。而して粗末な畫學紙の上には、逞ましく荒くれた君の手に似合はない繊細な線が描かれ始めた。

丁度人の肖像をかくとする畫家が、その人の耳目鼻口をそれ／＼綿密に觀察するやうに、君は山の一つの皺一つの襞にも君だけが理解すると思へる意味を見出さうと努めた。實際君の眼には山の總ての面は、そのまま總ての表情だつた。日光と雲との明暗に彩られた雪の重りには、熱愛を以て見極めやうと努める人々にのみ説き明かされる尊い謎が潜めてあつた。君は一つの謎を解き得たと思ふ毎に、小躍りしたい程の喜びを感じた。君の周圍には今はもう生活の苦情もなかつた。世間に對する不安も不幸もなかつた。自分自身に對するおくれ勝ちな疑ひもなかつた。子供のやうな快活な無邪氣な一本氣な心……君の唇からは知らず／＼軽い口笛が漏れて、君の手は躍るやうに調子を取つて、紙の上を走つたり、山の大きさや角度を計つたりした。

さうして幾時間が過ぎたらう。君の前には「時」といふものさへなかつた。やがて一つのスケッチが出来上つて、軽い満足の溜息と共に、働かし續けてゐた手をとめて、片手にスケッチ帖を取上げて眼の前に据ゑた時、君は軽い疲勞——軽いと云つても、君が船の中で働く時の半日分の勞働の結果よりは軽くない——を感じながら、今日が仕事のよい收穫であれかしと祈つた。畫學紙の上には吹き變はる風の爲めに亂れがちな雲の間に、その頂を見せたり隠したりし

ながら、眞白にそより立つ峠の姿と、その手前の廣い雪の野のこゝかしこに叢立つ針葉樹の木立や、薄く炊煙を地に靡かして所々に立つ惨めな農家、是等の間を鋭い刃物で立割つたやうな深い峽間、それ等が特種な深い感じを以て特種な筆觸で描かれてゐる。君は稍暫らくそれを見やつて微笑ましく思ふ。久振りで自分の隠れた力が、哀れな道具立てによつてはあがあるが、兎に角形を取つて生れ出たと思ふと嬉しいのだ。

然しながら狐疑は待ちかまへてゐたやうに、君が満足の心を十分味ふ暇もなく、足許から押寄せて来て君を不安にする。君は自分に誤ふものに對して警戒の眼を向ける人のやうに、自分の満足の心持ちを厳しく調べてかゝらうとする。そして今描き上げた畫を容赦なく山の姿と較べ始める。

自分が満足だと思つた所は何所にあるのだらう。それは謂はゞ自然の影繪に過ぎないではないか。向うに見える山はその儘寛大と希望とを象徴するやうな一つの生きた塊的であるのに、君のスケッチ帖に縮め込まれた同じものゝ姿は、何んの表情も持たない線と面との集りとより君の眼には見えない。

この悲しい事實を發見すると君は躍起となつて次ぎのページをまくる。而して自分の心持ち

を一際謙遜な、而して執着の強いものにし、粘り強い根氣でどうかして山をそのまま君の畫帖の中に生かし込まうとする。新たな努力が始まると、君はまた總ての事を忘れ果て、一心不亂に仕事の中に魂を打込んで行く。而して君が畫辨當を食ふ事も忘れて、四枚も五枚ものスケッチを作つた時には、もう大分日は傾いてゐる。

然しとてもそこを立去る事は出来ない程、自然は絶えず美しく蘇つて行く。朝の山には朝の命が、晝の山には晝の命があつた。夕方の山には又しめやかな夕方の山の命がある。山の姿は、その線と蔭日向とばかりでなく、色彩にかけても、日が西に廻ると素晴らしい魔術のやうな不思議を現はした。峠のある部分は鋼鐵のやうに寒く硬く、また他の部分は氣化した色素のやうに透明で消え失せさうだ。夕方に近づくにつれて、稍煙り始めた空氣の中に、聲も立てずに肅然と聳えてゐるその姿には、汲んでもくききない平明な神祕が宿つてゐる。見ると山の八合目と覺しい空高く、小さな黒い點が靜かに動いて輪を描いてゐる。それは一羽の大鷲に違ひない。眼を定めてよく見ると、長く伸ばした両の翼を微塵も動かさずに、身體全體を斜めにし、大きな水の渦に乗つた枯葉のやうに、その鷲は靜かに伸びやかに輪を造つてゐる。山が物云はんばかりに生きてると見える君の眼には、この生物は却て死物のやうに思ひなされる。況

してや平原の所々に散在する百姓家などは、山が人に與へる生命の感じに較べれば、慘めな幾個かの無機物に過ぎない。

晝は眞冬からは著しく延びてはゐるけれども、もう夕暮の色はどん／＼催して來た。それと共に肌身に寒さも加はつて來た。落日に彩られて光を呼吸するやうに見えた雲も、煙のやうな白と淡藍との影日向かげひなたを見せて、雲と共に大空の半分を領してゐた山も、見る／＼寒い色に堅くあせて行つた。而して霞とも云ふべき薄い膜が君と自然との間を隔てはじめた。

君は思はず留息をついた。云ひ解きがたい暗秋——それは若い人が戀人を思ふ時に、その戀が幸福であるにもかゝらず、胸の奥に感ぜられるやうな——が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をすゝりながら、ばたんと音を立て、スケッチ帖を閉ぢて、鉛筆と一緒にそれを懐ろに納めた。凍てた手は懐ろの中の温味をなつかしく感じた。辨當は食ふ氣がしないで、切株の上からそのまま取つて腰にぶらさげた。半日立ち盡した脚は動かさうとすると電氣をかけられたやうに痺れてゐた。やう／＼の事で君は雪の中から爪先きをぬいて一歩々々本道の方へ歸つて行つた。遙か向うを見ると山から木材や薪炭を積み下ろして來た馬車がちらほらと動いてゐて、馬の首につけられた鈴の音が冴えた響をたて、幽かに聞えて來る。それは漂浪の人が遙かに故

郷の空を望んだ時のやうななつかしい感じを與へる。その消え入るやうな、淋しい、冴えた音が殊になつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に歸つた人のやうに、君の心はまだ夢心地で、藝術の世界と現實の世界との淡々しい境界線を辿つてゐるのだ。而して君は歩きつゞける。

何時の間にか君は町に歸つて例の調劑所の小さな部屋で、友達のKと向き合つてゐる。Kは君のスケッチ帖を昂奮した目つきで彼所此所見返へしてゐる。

「寒かつたらう」

とKが云ふ。君はまだ本統に自分に歸り切らないやうな顔付きで、

「うむ。……寒くはなかつた。……その線の鈍つてゐるのは寒かつたからではないんだ」と答へる。

「鈍つてゐはしない。君がすっかり何もかも忘れてしまつて、断けまはるやうに鉛筆をつかつた様子がよく見えるよ。今日のは皆んな非常に僕の氣に入つたよ。君も少しは満足したらう」「實際の山の形に較べて見給へ。……僕は親父にも兄貴にもすまない」と君は急いで言ひわけする。

「何んで？」

Kは怪訝さうにスケッチ帖から眼を上げて君の顔をしげく見守る。

君の心の中には苦い灰汁あかじのやうなものが湧き出て来るのだ。漁いさなにこそ出ないが、本統をいふと漁夫の家には一日として安閑としていゝ日とてはないのだ。今日も、君が一日を晝に暮してゐた間に、君の家では家中で忙いへはしく働いてゐたのに違ひないのだ。建網たてあみに損じのある無し、網をおろす場所の海底の模様、大釜を据ゑるべき位置、棧橋の改造、薪炭の買入れ、米鹽の運搬、仲買人との契約、肥料會社との交渉……その外鯨漁の始まる前に漁場の持主がして置かなければならない事はあり餘る程あるのだ。

君は自分が晝に親しむ事を道樂だとは思つてゐない。ゐない所か、君に取つてはそれは生活よりも更に嚴肅な仕事であるのだ。然し自然と抱き合ひ、自然を晝の上に活かすといふ事は、君の住む所では一人だけが知つてゐる喜びであり悲しみであるのだ。外の人達は——君の父上でも、兄妹まごでも、隣近所の人でも——唯不思議な子供じみた戯れとよりそれを見てゐないのだ。君の考へ通りをその人達の頭の中にたんのうが出来るやうに打ちこむといふのは思ひも及ばぬ事だ。

君は埋窟では何等恥づべき事がないと思つてゐる。然し實際では決してさうは行かない。藝術の神聖を信じ、藝術が實生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑はない君も、その事柄が君自身に關係して來ると、思はず知らず足許がぐらついて來るのだ。

「俺れが藝術家であり得る自信さへ出來れば、俺れは一刻の躊躇もなく實生活を踏みにつつても親しいものを犠牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが……家の者共の實生活の眞剣さを見ると、俺れは自分の天才をさう易々と信ずる事が出來なくなつてしまふんだ。俺れのやうなものを補いてゐながら彼等に藝術家顔をする事が恐ろしいばかりでなく、僭越な事に考へられる。俺れはこんな自分が恨めしい。而して恐ろしい。皆んなはあれ程心から満足して今日々々を暮してゐるのに、俺れだけは丸で陰謀でも企んでゐるやうに始終暗い心をしてゐなければならぬのだ。如何すればこの苦しさこの淋しさから救はれるのだらう」

平常のこの考へがKと回ひ合つても頭から離れないので、君は思はず「親父にも兄貴にもすまない」と云つてしまつたのだ。

「どうして？」と云つたKも、君もそのまゝ黙つてしまつた。Kには、物を云はれないでも君の心はよく解つてゐたし、君は又君で、自分は奇麗に諦めながら何所までも君を藝術の捧養者

たらしめたいと熱望する、Kの淋しい、自己を滅した、温い心の働きをしつくりと感じてゐたからだ。

君等二人の眼は悒鬱な熱に輝きながら、互に瞳を合はすのを憚るやうに、やゝ燃えかすれたストーブの火を眺め入る。

さうやつて黙つてゐる中に君はたまらない程淋しくなつて来る。自分を憐れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げて、Kの手を取り上げて撫で、見たい衝動を幾度も感じながら、女々しさを けるやうにむづがゆい手を腕の所で堅く組む。

ふと煤けた天井から垂下つた電球が光を放つた。驚いて窓から見るともろ往來は眞暗になつてゐる。冬の日の春き隠れる早さを今さらに君はしみじみと思つた。掃除の行き届かない電球は埃と手垢とで殊更暗かつた。それが部屋の中をなほ悒鬱にして見せる。

「飯だぞ」

Kの父の荒々しい疝走つた聲が店の方から如何にも突慳貪つげんに聞こえて来る。普段から自分の一人息子の悪友でもあるかの如く思ひなして、君が行くと曾て機嫌のいゝ顔を見せた事のないその父らしい聲だつた。Kは一寸反抗するやうな顔付きをしたが、陰性なその表情を益陰性に

したとけで、きばきばと盾をつく様子もなく、父の心と君の心とを窺ふやうに聲のする方と君の方とを等分に見る。

君は長座をしたのがKの父の氣に障つたのだと推すると座を立たうとした。然しKはさういふ心持ちに君をしたのを非常に物足らなく思つたらしく、君にも是非夕食を一緒にしろと勧めてやまなかつた。

「ちや僕は晝の辨當を喰はずにこゝに持つてるからこゝで食はうよ。遠慮なく濟して來たまへ」と君は云はなければならなかつた。

Kは夕食をに勧めながら、ほんたうはそれを両親に打ち出して云ふ事を非常に苦にしているたらしく、さればとてまづい心持ちで君を歸へすのも堪へられないと思ひなやんでゐたらしかつたので、君の言葉を聞くと活路を見出したやうに少し顔を晴れ々させて調劑室を立つて行つた。それも思へば一家の貧窮がKの心に染み渡つたし、しだつた。君は獨りになると段々暗い心になり増るばかりだつた。

それでも夕飯といふ聲を聞き、戸の隙から漏れる焼魚の匂をかぐと、君は急に空腹を感じ出した。而して腰に結び下げた辨當包みを解いてストーブに寄り添ひながら、椅子に腰かけたまゝ

の膝の上でそれを開いた。

北海道には竹がないので、竹の皮の代りにへぎで包んだ大きな握り飯はすつかり凍てゝしまつてゐる。春立つた時節とは云ひながら一口寒空に、切株の上にさらされてゐたので、飯粒は一粒々々ぼろ／＼に固くなつて、持った手の中から壊れ落ちる。試みに口にもつて行つて見ると米の持つ甘味はすつかり奪はれてゐて、無味な繊維のかたまりのやうな觸覚だけが冷たく舌に傳はつて来る。

君の眼からは突然、君自身にも思ひもかけなかつた熱い涙がほろ／＼とあふれ出た。じつと坐つたまゝではゐられないやうな寂寥の念が眞暗に胸中に擴かつた。

君はそつと座を立つた。而して辨當を元通りに包んで腰にさげ、スケッチ帖を懷ろにねぢこむと、こそ／＼と入口に行つて長靴をはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍つて鐵板のやうに堅く冷たかつた。

雪は燐のやうなかなかな光を放つて眞黒に暮れ果てた家々の屋根を被うてゐた。淋しいこの横町は人の影も見せなかつた。暫らく歩いて例のデパートメント・ストアの出店の角近くに來ると、一人の男の子がスケート下駄（下駄の底にスケートの齒をすげたもの）をはいて、でき

ば、く凍つた道の上をが／＼と音をさせながら走つて來た。その兒はスケートに夢中になつて君の側をすりぬけても君には氣が付いてゐないらしい。

「氷の上が泣れ出した時はほんとに夢中になるものだ」

君は自分の遠い過去を覗き込むやうに淋しい心の中にもかう思ふ。何事を見るにつけても君の心は痛んだ。

デパートメント・ストアのある本通りに出ると打つて變つて賑やかだつた。電燈も急に明るくなつたやうに兩側の家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾を織つた。それは君に取つては、その場合の君に取つては、一つ／＼見知らぬものばかりのやうだつた。そこいらから起る人聲や荷籠の雜音などがびん／＼と君の頭を針のやうに刺戟する。見物人の前に引き出された見世物小屋の野獸のやうないらだ／＼しさを感じて、君は眉根の所に電光のやうに起る痙攣を小うるさく思ひながら、むづかしい顔をしてさつさと賑やかな往來を突きぬけて漁師町の方へ急ぐ。

然し君の家が見え出すと君の足はひとりでにゆるみ勝ちになつて、君の頭は知らず識らず、尙低くうなだれてしまつた。而して君は疑はしさうな眼を時々上げて、見知り越しの顔にでも

遇ひはしないかと氣遣かつた。然しこの界限はもう辭まり返つてゐた。

「駄目だ」

突然君はかう小さく云つて往來の眞中に立ち停つてしまつた。さうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背中に流れる線は、若しそこに見守る人がゐたならば、思はずぞつとして異常な憂愁と刀とを感じるに違ひない不思議に強い表現を持つてゐた。

暫らく釘づけにされたやうに立ちすくんでゐた君は、やがて自分自身をもぎ取るやうに決然と肩をそびやかして歩き出す。

君は自分でも何處をどう歩いたか知らない。やがて君が自分に氣が付いて君自身を見出した所は、海産製造會社の裏の險しい甍を登りつめた小山の上の平地だつた。

全く夜になつてしまつてゐた。冬は老いて春は來ない——その壞れ果てたやうな荒涼たる地の上高く、寒さをかすかな光にしたやうな雲のない空が、息氣もつかずに、凝然として延び擴がつてゐた。色々な半度と色々な光彩でちりばめられた無数の星々の間に、冬の空の誇りなる参宿が、微妙な傾斜を以て三つならんで、何かの凶兆のやうに一際きら／＼と光つてゐた。星は語らない。たゞ遙かな山裾から、干潮になつた無月の潮騒が、海妖の單調な誘惑の歌のや

うに、なまめかしく撫でるやうに聞こえて來るばかりだ。風が落ちたので凍り付いたやうに寒く沈み切つた空氣は、この海のさゝやきの爲めに鈍く震へてゐる。

君はその平地の上に立つてぼんやりあたりを見廻はしてゐた。君の心の中には先程から恐ろしい企圖が眼ざめてゐたのだ。それは今日に始つた事ではない。ともすれば君の油斷を見すまして、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精のやうに、その企圖は心の底から現はれ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生れながら、そんな誘惑を感じる事さへやくさな事だと思つた。然し一旦その企圖が頭を擡げたが最後、君は魅られた者のやうに、蕩撞き苦しみながらもぢり／＼とそれ成就する爲めには凡てを犠牲にしても悔いないやうな心になつて行くのだ。その恐ろしい企圖とは自殺する事なのだ。

君の心は妙にしんと底冷えがしたやうに棘々しく澄み切つて、君の眼に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なり過ぎなかつた。無際限な唯一つの荒廢——その中に君だけが呼吸を續けてゐる。それが堪らぬ程淋しく恐ろしい事と思ひなされる荒廢が君の上下四方に擴がつてゐる。波の音も星の瞬きも、夢の中の出來事のやうに、君の知覺の遠い／＼末梢に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだつた。凡ての現象

がてんぐばらぐに互の連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死の方へとちり／＼深まつて行かうとした。重錘おもりをかけて深い井戸に投げ込まれた燈明のやうに、深みに行く程君の心は光を増しながら感じを強めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐるのだ。

君の頭が痺れて行くのか、世界が痺れて行くのか、ほんたうに判らなかつた。恐ろしい境界に臨んでゐるのだと幾度も自分を警めながら、君は平氣な氣持ちでとてつもない呑氣な事を考へたりしてゐた。而して君は夜の更けて行くのも寒さの募るのも忘れてしまつて、そろ／＼と山鼻の方へ歩いて行つた。

脚の下遠く黒い岩濱が見えて波の遠音が響いて来る。

唯一飛びだ、それで煩悶も疑惑も奇麗さつぱり帳消しになるのだ。

「家の者たちはほんたうに氣が違つてしまつたでも思ふだらう。……頭が先きにくだけるか知らん。足が先きに折れるか知らん」

君は聲きかせず、ぼんやり崖の下を覗きこみながら、他人の事でも考へるやうに、さう心の中でつぶやく。

不思議な痺れはどん／＼深まつて行く。波の音なども少しづづかすかになつて、耳に這入つたり這入らなかつたりする。君の心はたゞ一圖に、眠り足りない人が思はず險をふさぐやうに崖の底を目かけてまろび落ちやうとする。危い……危い……他人の事のやうに思ひながら君の心は君の肉體を崖の際から眞逆様につき落さうとする。

突然君は撥ね返されたやうに正氣に歸つて後ろに飛び退さつた。耳をつんざくやうな鋭い音響が君の神経をわな／＼かしたからだ。

ぎよつと驚いて今更のやうに大きく眼を見張つた君の前には、平地から突然下方に折れ曲つた崖の縁が、地球の傷口のやうに底深い口を開けてゐる。そこに知らず／＼近づいて行きつゝあつた自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正氣になつた。

鋭い音響は眼の下の海産製造會社の汽笛だつた。十二時の交代時間になつてゐたのだ。遠い山の方からその汽笛の音はかすかな反響こだまになつて、二重にも三重にも聞こえて來た。

もう自然はもとの自然だつた。いつの間にか元通りな崩壊したやうな淋しい表情に満たされ、涙もなく君の周圍に擴かつてゐた。君はそれを感じると、ひたと底ない寂寥の念に襲はれ出した。男らしい君の胸をぎゆつと引きしめるやうにして、熱い涙が留度なく流れ始めた。君

は唯獨り眞夜中の暗闇の中にすゝり上げながら眞白に積んだ雪の上に蹲つてしまつた、立ち續ける力さへ失つてしまつて。

九

君よ！

この上君の内部生活を付度したり揣摩したりするのは僕のなし得る所ではない。それは不可能であるばかりでなく、君を演ずると同時に僕自身を演ず事だ。君の談話や手紙を綜合した僕のこれまでの想像は謬つてゐない事を僕に信ぜしめる。然し僕はこの上の想像を避けやう。兎も角君はかゝる内部の葛藤の激しさに堪へかねて、去年の十月にあのスケッチ帖と眞率な手紙とを僕に送つてよこしたのだ。

君よ。然し僕は君、爲めに何を爲す事が出来やうぞ。君とお會ひした時も、君のやうな人が——全然都會の臭味から免疫されて、過敏な神経や過量な人爲的智見に煩はされず、強健な意力と、強靱な感情と、自然に哺まれた叡智とを以て自然を端的に見る事の出来る君のやうな土の子が——藝術の捧養者となつてくれるのをど程……んだらう。けれども僕は喉まで出さうに

なる一言を強ひて抑へて、凡てを纏つて藝術になつたらいゝだらうとは君に勧めなかつた。

それを君に勧めるものは君自身ばかりだ。君が唯獨りで忍ばなければならない煩悶——それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは云へ、それは君自身で苦しみ、君自身で癒さなければならぬ苦しみだ。

地球の北端——そこでは人の生活が、荒らくれた自然の威力に壓倒されて、瘦地におとされた雑草の種子のやうに弱々しく頭を擡げてゐ、人類の活動の中心からは見逃がされる程隔つた地球の北端の一つの地角に、今、一つのすぐれた魂は惱んでゐるのだ。若し僕がこの小さな記録を公にしなかつたならば誰もこのすぐれた魂の悩みを知るものはないだらう。それを思ふと凡ての現象は恐ろしい神祕に包まれて見える。如何なる結果を齎らすかも知れない恐ろしい原因は地球のどの隅つこにも隠されてゐるのだ。人は畏れないではゐられない。

君が一人の漁夫として一生を過ごすのがいゝのか、一人の藝術家として終身働くのがいゝのか、僕は知らない。それを軽々しく云ふのは餘りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならぬ。僕はその時が君の上に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。

而して僕は、同時に、この地球の上のそここゝに君と同じ疑いと悩みとを持つて苦しんで

ある人々の上に最上の道が開けよかしと祈るものだ。この切なる祈りの心は君の身の上を知るやうになつてから僕の心の中に殊に激しく強まつた。

ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸してゐる。この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生れ出やうとするものゝ悩み——それを僕はしみじみと君によつて感ずる事が出来る。それは湧き出で跳り上る強い力の感じを以て僕を涙ぐませる。

君よ！今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擽げて吸ひ込んでゐる。春が来るのだ。

君よ春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし……僕はたゞさう心から祈る。

(一九一八・四月・大阪毎日新聞に一部分掲出)

小さな者へ

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上つた時、——その時までお前たちのバ、は生きてゐるかゝらないか、それは分らない事だが——父の書き残したものを繰擧げて見る機会があるだらうと思ふ。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現はれ出るだらう。時はどん／＼移つて行く。お前たちの父なる私とその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来なない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を嗤ひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を嗤ひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏躰にして、高い遠い所に私を乗越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐるかといふ事實は、永久にお前たちに必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの書き物を讀んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤ふ間にも、私達の愛はお前たちを暖め、慰め、勵まし、人生の可能性をお前たちの心に味覺させずにおかないと私は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてゝ書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人のマ、を永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。こ

の間ある雑誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけたといつて來た時、私は何んの氣もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だ」と書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は悪事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

颯方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川沿ひの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲（綿雲）に閉ぢられた陽の光を二重に遮つて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かしたり、使を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころげこんで來た時は、家中のものが思はずはつと息氣（いそ）をついて安堵したが、晝になつても晝過ぎになつても出産の模樣が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌てゝしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待

つてゐられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の両手をいつかり握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせやうとした。然し暫らくの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまつた。斬さへかいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から驅けつけてくれた醫者も、顔を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が来る度毎に何か非常の手段を用ゐるやうかと案じてゐるらしかつた。

晝過ぎになると戸外の吹雪に段々鎮まつていつて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に來てそつと戯れるまでになつた。然し産室の中の人々にはますます重い不安の雲が蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕はれてしまつた。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と胎見だけだつた。二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

丁度三時と思はしい時に——産氣がついてから十二時間目に——夕を催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと臉を開いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげといふより、恐ろしげに顔をゆがめた。而して私の上體を自分 胸の上に くし込んで、背中を羽がひに拘きすくめた。若し私が産婦と同じ程度に

いきんでゐなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこにゐる人々の心は思はず總立ちになつた。醫師と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を勵ました。ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔を擧げて見た。産婆の膝許には血 氣のない嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は毬でもつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒々々々といつてゐた。看護婦がそれを持つて來た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の中にあけると命じた。激しい芳芬と同時に盥の湯は血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸された。暫らくしてかすかな産聲が息氣もつけない緊張の沈黙を破つて細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現はれ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほゝゑんだ。私はそれを見ると何んといふ事なしに涙が眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たちに何んといつていひ現はすべきかを知らない。私の生命全體が涙を私の眼から搾り出したとでもいへばいゝのか知らん。その時から生活 諸相が凡て眼 前で變つてしまつた。

お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このやうにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れやうに離易の差こそあれ、父と母とに與へた不思議な印象に變りはない。

からし、若い夫婦はつき／＼にお前たち三人の親となつた。

私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐた。而して始終醒醒しながら何一つ自分を「満足」に近づけるやうな仕事をしてゐなかつた。何事も獨りで噛みしめて見る私の性質として、表面には十人並な生活を生活してゐながら、私の心はやゝともすると突き上げて来る不安にいら／＼させられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を悪んだ。何故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のある爲めに後ろに引ずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。家庭の建立に費やす勞力と精力とを自分は他に用ひべきではなかつたのか。

私は自分の心の亂れからお前たちの母上を屢々泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちを没義道に取りあつた。お前達か少し執念く泣いたりいがんたりする聲を聞くと、私は何か惨虐な事をしないではゐられなかつた。原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思はず机をたゞいて立上つたりした。而して後ではたまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐながら、

激しい言葉を遣つたり、嚴しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が來た。如何してもお前達を子守りに任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寢かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがつたり、一人に小用をたさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に來てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徴候があるといつた時には、私は唯譯もなく青くなつてしまつた。検査の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つとなるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私とその町に住まひ始めた頃働いてゐた剋明な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し／＼涙を拭いた。お前たちは母上を寢臺の上に見つけると飛んでいつかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかさされてゐないお前たちの母上は、寶を抱きかゝへるやうにお前たちをその胸に集めやうとした。私はいゝ加減にあしらつて

お前たちを寢臺に近づけないやうにしなければならなかつた。忠義をしやうとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを辯解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持ちを幾度も味はつた。それでも私はより怒る勇氣はなかつた。引き いたすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。支關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等は二三人もゐる辭に、残しておいた赤坊のおしめを代へやうともしなかつた。氣持ち悪げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐしよ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだつた。やうやうお前たちを寢かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は昂奮してゐた。仕事をすまして寢付かうとする十一時前後になると、神経の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。曉方になるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされる私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝飯を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心のやうなものゝ出來た頭を抱へて仕事をすする所に出懸けた。

北國には冬が見る／＼通つて來た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寢臺の上に起きかへつて窓の外を眺めてゐたが、私の顔を見ると早く退院がしたいといひ出した。窓の外の

楓があんなになつたのを見ると心細いといふのだ。成るほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの淋しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本統の心持ちはそんな所にはなくつて、お前たちから一刻も離れてはゐられなくなつてゐたのだ。

今日いよ／＼退院するといふ日は霰の降る、寒い風のびゅう／＼と吹く悪い日だつたから、私は思ひ止らせやうとして、仕事をすますとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが貰つたものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の隅でこそ／＼と始末してゐた。急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりに集つて嬉しさうに騒いでゐた。私はそれを見ると涙かこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん／＼押し寄せて來る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雑草の株のやうに、互により添つて暖みを分ち合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち四人の暖みでは間に合はない程寒かつた。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを勞はりながら旅雁のやうに南を指して遁

れなければならなくなつた。

それは初雪のどん／＼降りしきる夜の事だつた。お前たち三人を生んで育てくれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れゝ事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残りを惜しんだ。陰鬱な津輕海峡の海の色も後ろになつた。東京までついて来てくれた一人の學生は、お前たちの中の一番小さい者を、母のやうに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までゐた所とちがつて、東京には澤山の親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なくK海岸にさゝやかな貸別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼっこをして楽しく二三時間を過すまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小廉を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼れはどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母

上は假初の風邪からぐん／＼悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病兒は病兒で私を暫らくも手放さうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私は遂に倒れた。病兒と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の爲めに呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔やまうとはしなかつた。お前たちの爲めに最後まで戦はうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の真相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上 顔を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な清々しい顔をして枕についたまゝ母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對する Resignation と共にお前たちに對する根強い執着がまゞ／＼と刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は悽慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々K海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬとも、前た

ちに逢ない覺悟の臍を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる、——而し 實際着なかつた——晴着を着て座を立つた母上は内外の母親の眼の前でさめくと泣き崩れた。女ながらに氣象の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいゝ位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまつた。大空を渡る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるかそれは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のゐる所に来ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、——一人はよちくと歩いて、——一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた——母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頭はない、驚きの眼は大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前たちは女中に勧められて兵隊のやうに擧手の禮をした。母上は笑つて軽く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離

れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息氣を引きとるまでの一年と七ヶ月の間、私たちの間には烈しい戦が闘はれた。母上は死に對して最上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を開放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめ込むために、闘つた。血まぶれになつて闘つたといつていゝ。私も母上もお前たちも幾度弾丸を受け、刀創を受け、倒れ、起上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを壓倒した。而して死が凡てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を読む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら死んでもお前たちに會はない決心を踏さなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れればかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗らくする事

恐れ、お前たちの伸び伸びで行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼児、死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時、女中をお前たちにつけて楽しく一日を過ぎさせて貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」
とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にあつた。若しお前たちの母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうと、へ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に強ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが残酷だと思ふ時があるか、知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寝てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齡になつたら私のした事を、即ち母上のさせやうとした事を何高く見る時が来るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて来たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいゝのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書

いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周囲のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出来ない、憐れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力を徹底させて見やうとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を見出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、卒役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出来るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらし、懨懨な気分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて来る。而して一言バ、といつたきりで、私の膝によりかゝつたまましくしくと泣き出してしまふ。あゝ何がお前たちの顔はない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、この世は淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駈けて

行つて、「マ、ちゃん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐざと刮り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫の世界を眼前に見る。

世の中の人は私の述懐を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもこゝにも倦きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人には閑散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝらず、私といはず、お前たちも行く／＼は母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が来るのだ。世の中の人が無頓着だといつてそれを恥ぢてはならない。それは恥づべきことぢやない。私たちはそのありうちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかつて見ることが出来る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷く。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金銭の累ひからは自由だつた。飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出来た。私たちは偶然な社会組織の結果からこの特權ならざる特權を享受した。お前たちのあるものはかすかながらU氏一家の模様を覚えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有ちながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の薬が飲みたかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎日下血しながら役所に通つた。ハンケチを巻き通しな喉からは嘔吐しゃがした聲しか出なかつた。働けば病氣が重なる事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舎の醫師の不注意から靜脈を外れて、激烈な熱を引起した。而してU氏は無資産の老母と幼児とを後に残してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思ひ出すと共に、U氏を思ひ出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋める

工夫をしなければならぬ。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで擴げさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人生は淋しい。私たちは唯さういつて済してゐる事が出来るだらうか。お前たちと私とは、血を味つた獸のやうに、愛を味つた。行かう、而して出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救ふために働らかう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものはたゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨て、人生に乗り出して行くがよい。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと静まつた夜の沈黙の中にお前たちの平和な寢息だけが幽かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にと

て贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があゝの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年だけたものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にはミネルバの像や、ゲーテや、クロムウエルやナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で觀てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨てゝしまふことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて來た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。産は女の出陣だ。いゝ子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の装ひをしたのだ。——その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

深夜の沈黙は私を嚴肅にする。私の前には机を隔てゝお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものゝ作用にお前たちを打任かしてよく眠れ。さうして明日は昨日より大

きく賢くなつて寢床の中から跳り出して来い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打負けやうとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出来るだらう。

小 さ き 者 よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れぬ者の前に道は開ける。行け。勇んで。小 さ き 者 よ。

(一九一八・一月・新潮所掲)

ドモ又の死

禁無断興行

人物

花田

澤本(渾名、生蕃)

戸部(渾名、ドモ又)

瀬古(渾名、若様)

青島

とも子——モデルの娘

若き畫家

所

畫室

時

現代 氣候のよい時節

澤本と瀬古とがとも子をモデルにして畫架に向つてゐる。戸部は物憂さうに床の上に臥ころんでゐる。

澤本——(瀬古に) おい瀬古、ドモ又かうなつてゐるぞ、死ぬんぢやあるまいな。

瀬古——僕も全くなりたくなるねえ。死にたくなるねえ。……ともちゃん、お前もおなかですいたらう。

とも子——もう物をいつてもいいの、若様。

瀬古——いゝよ。おなかですいたらう。

とも子——そんなでもないことよ。

戸部うなる。

どうしたの、戸部さん、あなた死ぬとこなの。まだ早いわ。

瀬古——ともちゃんはこのに来る前に何か食べて来たね。

とも子——えゝ食べてよ、おはぎを。

澤本——黙れ。あゝ俺れはもう駄目だ(腹をかゝへる) 睡も出なくなつちまいやがつた。

瀬古——ふうん、おはぎを……強勢だなあ。いくつ食べたい。

とも子——まあいやな瀬古さん。

瀬古——而しておはぎはあんこのかい、きなこのかい、それとも胡麻……白狀おし、どれをいくつ……

澤本——瀬古やめないか、俺れは本當に怒るぞ。飢い時にそんな話をする奴か……あゝ俺れはもう駄目だ。三日食はないんだ、三日。

瀬古——澤本は生蕃だけに藝術家としての想像力に乏しいよ。僕が今こゝにおはぎを出すから見てろ——ぢやない聞いてろ。ともちゃんが家を出ようとすると、お母さんが「ともやこゝにこんなものが取つてあるから食べておいでな」といつて、鼠入らずの中から、ラーヴェンダー色のあんこと、ネーブルス・エローのきなこと、あのヴェラスケスが用ひたといふプアーリツシ・グレーの胡麻……

戸部うなり聲を立てる。

澤本——だから貴様は若様だなんて輕蔑されるんだ。そんなだらしのない空想が俺れ達の藝術に取つて何んの足しになると思つてるんだ。俺れ達は眞實の世界に立脚して、根強い作品を創り出さなければならぬんだ。だから……俺れは残念ながら腹がからつぽで、頭まで少し

變になつたやうだ。

とも子——生蕃さんは普段あんまり大喰ひをするから、こんな時に困るんだわ。……それにしてもどうしてこゝにゐる人達の晝はこんなに賣れないんでせうねえ。

澤本——わかり切つてゐるぢやないか。俺れ達が立派なものを描くからだ……世の中の奴には俺れ達の仕事解らないんだ……あゝ俺れはもう駄目だ。

瀬古——ともちゃん、そのおはぎの舌ざはりは一體どんなだつたい……僕には今日はおはぎがシステイン・マドンナの胸のやうに想像されるよ。ともちゃん、お前のその帯の間に、マドンナの胸の肉を少しばかり買ふ金がありやしないか。

とも子——なかつたわ。私随分長い間何にも貰はないんですもの。

瀬古——許しておくれ。ともちゃん、僕達はお前んちの貧乏もよく知つてるんだが……

澤本——悪い〜。そんなに長く何にも君にやらなかつたかい、俺れ達は全く悪いや。待てよ、と。ない。無い筈だ。今頃やる物がある位なら遠の昔にやつてゐるんだ。

戸部——お母さん怒らないか。

とも子——偶にいやな顔はしてよ。

戸部——ぢや君は、もうこゝには寄りつかなくなるね。(うなる)

とも子——そんなこと……餘計なお世話よ。私のしたいやうにするんだから。

澤本——瀬古の若様かひかへてゐる間は大丈夫だが……

とも子——人聞きの悪い……よして下さい。

戸部うなる。

瀬古——ともちゃん、頼むから毎日来ておくれ。頼むよ。僕達は一人残らずお前を崇拜してゐるんだ。お前が歸ると、この晝室の中は荒野同様だ。僕達は寄つてたかつてお前を讚美して夜を更かすんだよ。尤もこの頃は、餘り夜更かしをすると、なほのこと腹が空くんで少し控へ氣味にはしてゐるがね。

とも子——何んて讚美するの。とも子の奴はおかめつ面のあばずれだつて。

瀬古——だが収入が無くつちやお前んちも暮らせないねえ。

とも子——知れたこつてすわ、馬鹿々々しい。

澤本——ぢや矢張ドモ又がいつたやうに、君は何處かに河岸をかへるんだな。

とも子——さあねえ。さうするより仕方がないわね。私は一體晝伯とか先生とかのくつ附いた

晝かきが大嫌ひなだけれども、……いやよ、太當にあいつらは……何んていふと、お高くとまる癖に、ひとの體にさはつて見たがつたりして……けれどもお金にはなるわね。あなた方見たいに食べるものもなくなつちや私は半日だつてやり切れないわ。大の男が五人も寄つてゐる癖に全くあなた方は甲斐性なしだわ。

戸部——畜生……出て行け、今出て行け。

とも子——だから餘計なお世話だつてさつき云つたぢやないの。いやな戸部さん。(悔しさうに涙を眼にためる)

戸部うなる。

云はれなくたつて、出たけりや勝手に出ますわ。あなたのお内儀さんぢやあるまいし。

戸部——俺れ達の仕事が認められないからつて、裏切りをするやうな奴は……出て行け。

瀬古——腹がすくと人は怒りつぽくなる。戸部の氣むづかしやの腹がすいたんだから、謂はば

ペガサスに悪魔が飛び乗つたやうなもんだよ。お前氣を悪くしちやいけなよ。

とも子——だつて戸部さん見たいな解らず屋つてないもの。晝なんてちつとも賣れない晝かきばかりの、こんな穢ない小屋に、私もう半年の餘も通つてゐてよ。餘程有難く思つていゝ譯

だわ。それを人の氣も知らないで……

戸部——貴様は（瀬古を指し）こいつの顔が見たいばかりで……
とも子——焼餅やき。

戸部——馬鹿（うなる）

澤本——あゝ俺れはもう駄目だ。死ぬ位なら俺れは畫をかきながら死ぬ。畫筆を握つたまふつ倒れるんだ。おい、ともちゃん、惡體をついてるひまにモデル臺に乗つてくれ。……それにしても花田や青島の奴、どうしたんだ。

瀬古——全くおそいね。計略を敵に見すかされてむざ／＼と討死したかな。一體計略々々つて花田の奴は何をする氣なんだらう。

澤本——おい、ともちゃん……乗るんだ。君は俺れ達のモデルぢやないか。若様も描けよ。

瀬古——うん描かう。一體計略々々つて……おい生蕃、ガランスをくれ。

澤本——その色こそは余が汝に求めんとしつゝあつたものなんだ。貴様のところにも無いんか。とも子——ドモ叉さんもお描きなさいな。人つてものはうなつてばかりゐたつてお金にはならないわ、自動車ぢやあるまいし。

澤本——ドモ叉ガランスを出せ。

戸部——（自分の畫箱の方に這ひすつて行つて中み探しながら）無い。

瀬古——ベガサスの腰ぬけはないぜ。お前も起き上つて描けよ。花田の畫箱はどうだ。（隣りの部屋から畫箱を持ち出して探しながら歌ふ）

「一本のガランスをつくせよ

空もガランスに塗れ

木もガランスに描け

草もガランスに描け

□□もガランスにて描き奉れ

神をもガランスにて描き奉れ

ためらうな、恥ぢるな

まつすぐにゆけ

汝の貧乏を

一本のガランスにて塗りかくせ」

村山槐太も貧乏して死んだんだ。あゝあ、あいつの畫箱にもガランスは無かつたらうな。描き奉つてしまつたんだから。

「天にまします我等の神よ」途中はぬかします。「我等に日用の糧を今日も」ぢやない「今日こそは與へ給へ」。序でに我等にガランスを與へ給へ。あとは腹がへつてゐるからぬかします。「アーメン」。えゝと我等にガランスを與へ給へ。ガランスを與へ給へ。我等に日用の糧を與へ給へ。(銀紙に包んだものを探り出す)我等に(銀紙を開きながら喜色を帯ぶ)日用……糧を……我等に日用の糧を……(急に跳り上つて手に持つた紙包をふりまはす)……ブラボー……ブラビッシモ……おゝ太陽は登つた。

一同思はず瀨古の周圍に走りよる。

澤本——食へさうなものが出て來たんか。

戸部——ガランスか。

瀨古——澤本、お前はさもしい男だなあ、なんぼ牛番と渾名されてゐるからつて、美術家ともあらうものが「食へさうなもの」とは何んだね。

澤本——食へさうなものが出て來たんかといつただけで、何んでさもしい。あゝ俺はもう駄目

だ。食へさうなものなんて云つたら駄目になつた……畜生、俺は畫を描く。ガランスが無けりや血で描くんのだ。

畫架の方に行きかける。

瀨古——いゝ覺悟だ。そこでともちゃん、これを何んだと思ふ。これは勿體なくもチョコレート

の食ひ残りなんだ。

澤本と戸部と勢込んで瀨古に逼る。

戸部——俺れによこせ。

瀨古——これはガランスぢやないよ。

戸部——ガランスかつて聞いたのは、ガランスだと困ると思つてさう聞いたんだ。俺れはガランス位はしくはない。それは俺れのだ。俺れによこせ。

澤本——ガランスが無けりや、俺れだつて食へさうなものを辭退する譯ぢやないぞ。ドモ又い

い加減をいふな。これは俺れんだ。

瀨古——さうがつくするなよ。待て……。今僕が公平な分配をしてやるから。(パレットナイフでチョコレートに筋をつける)これで公平だらう。

澤本——四つに分けてどうするんだ。

瀬古——(澤本と戸部にチョコレットを食ひかゝせながら)最後の一片は勿論僕達の守護女神ともちやんに獻げるのさ。僕はなんといふ幻滅の悲哀を味はねばならないんだ。このチョコレットの代りにカランスが出て来て見ろ、君達はこれほど眼の色を變へて熱狂しはしなからう。ミューズの女神も一片のチョコレットの前には、醜い老いぼれ婆に過ぎないんだ。(今度は自分が食ひかゝく)。ミューズを老いぼれ婆にしくさつたチョコレット奴、藝術家が今復讐するから覺悟しろ(ぼりく)と甘さうに食ふ。とも子の方に向け最後の一片をさし出しながら)ともちやん、さあ。

とも子——まあいやだ、誰がひとの食べかいたものなんか食べるもんですか。

瀬古——(驚いた様子をしながら)え、食べない。これを。食べないとはお偉らいねえ。お前の趣味がそれ程ノープに洗煉されてゐるとは思はなかつた。全くお前は見上げたもんだねえ。お前は全くいゝ意味で貴族的だねえ。レデイのやうだね。それぢや僕が……

澤本と戸部とが驚ひかゝる前に瀬古逸早くそれを口に入れる。

瀬古——来た〜花田達が来たやうだ。早く口を拭へ。

花田と青島登場。

花田——(指をほきん〜鳴らす癖がある)お前達は始終俺れのことを俗物だ〜といつてゐやがつたな。若様どうだ。

瀬古——僕は汚されたミューズの女神の爲めに今命かけの復讐をしてゐるところだ。待つてくれ(口をもが〜させながら物を云ふ)

花田——貴様俺れのチョコレットを喰つてゐるな。この畫室にはそのほかに食ふものはない筈だ。俺れはそれを昨日畫箱の中にちやんとしまつておいたんだ。

澤本——隠し食ひをしておきながら……貴様はチョコレットで畫が描けるとでも思つてゐるか。神聖なる畫箱にチョコレットを……だから貴様は俗物だよ。

花田——何んとでもいへ。然し俺れがゐるなかつたら、お前達は飢ゑ死にをするより仕方ないところだつたんだ。

澤本——まあいゝから、貴様の計略といふものゝ報告を早くしろ。

花田——さうだ。愚圖々々しちやゐられない。おい青島、堂脇は九頭龍の奴と一緒に來るといつてたか。

青島——そんなことをいつてたやうだ。何しろ堂脇のお嬢さんていふのには、僕は全く憧憬してしまつた。その姿に見とれてゐたもんで、おやぢの言葉なんか、半分がた聞き漏らしちゃつた。

澤本——馬鹿。

青島——あの娘なら藝術が本當にわかるに違ひない。藝術家の妻になるために生れて来たやうな處女だ。あの大俗物の堂脇があんな天女を生むんだから皮肉だよ。而してかの女は、藝術に對する心からの憧憬を踏みにじられて、遂に大金持ちの馬鹿息子のところにも片付けられてしまふんだ……あんな人をモデルにつかつて一度でも畫が描いて見たいなあ。

瀬古——そんなか。

青島——そんなだとも。

とも子——今日はもう私、用がないやうだから歸りますわ。

戸部——俺れ用があるよ。くだらないことばかりいつてやがる、俺れが描くから……

とも子——又うなりを立て、床の上へたばるんぢやなくつて。

戸部——いゝから……こいつら、うつちやつておけ。

戸部ひとりだけとも子をモデルにして描きはじめる。その間に次ぎの會話が行はれる。

花田——全くともちゃんに歸られちや困るよ。青島、貴様餘計なことをいふからいかんよ。……

……兎に角皆んな氣を落ちつけて俺れの報告を聞け。ドモ又もともちゃんも、そこで聞いているんだぜ……待てよ（時計を出して見ようとして、無くなつてゐるのを発見）時計もセブンか。セブンどころぢやないイレブン位だらうもろ。いそがないと間に合はない。今朝俺れは青島と手分けをして、青島は堂脇んちの庭に行き、俺れは九頭龍の店に行つた。とてもたまらない奴だ。はじめの間は、中々取りつく島もなかつたが、たうとう利を以ておびき出してやつた。名は今一寸いへないが私共の仲間一人、岡抜けてえらい天才がある、油でもコンテでも全然拔群で美校の校長も、黒馬會の白島先生も藤田先生も、凡そ先生と名のつく先生は、彼れの作品を見たものは一人残らず、唯驚嘆するばかりで、是非展覽會に出品したらといふんだが、奴、旋毛曲りで、うんといはないばかりか、てんで今の大家なんか眼中になく、貧乏しながらも、黙つてこつくと畫ばかり描いてゐた。だから世間では、俺れ達の仲間の外に、奴のことを知つてゐるものは一人だつてゐやあしない。

澤本——うん全くそれはその通りだ。

花田——ところがその男が貧に通り、飢ゑに疲れてたうとう昨日死んでしまった。

澤本——馬鹿をいふない。俺れは兎に角まだ生きてるぞ。

花田——誰が死んだのはお前だつてさういつたい。……ところで俺れ達は實に悲歎に暮れてしまった。一體俺れ達が、五人揃つて貧乏のどんづまりに引きさがりながらも、鼻歌まじりで、勇んで暮してゐるのは、誰にもあづけておけない仕事があるからだ。その仕事をし遂げるまでは、縦令死神が手をついて迎へに來ても、死神の方をたゞき殺す位な勢ひでやつてゐるんだ。その中でもがんばり方といひ、力量といひ、一段も二段も立勝つてゐたのは奴だつた。東京の隅つこから世界の美術をひつくり返すやうな仕事が出るのを俺れ達は彼れに於て期待してゐた。だのに、餘りに勝れたものは神も妬むのだらう、奴は倒れてしまった。奴は火だつた。焰だつた。奴の燃えることは奴の滅びることだつたんだ。

戸部——貴様さういつたか。

花田——うむ。

戸部——よくいつた。

花田——俺れはまだかうもいつた、奴には一人の弟があつて、その弟の細君といふのが、心と

姿との美しい女だつた。而してその女が毎日俺れ達の畫室に來てモデルになつてくれた。俺れ達のやうな、物質的には無能力に近いグループの爲めに盡してくれるその女の志は美しいものだつた。奴は窃かにその弟の細君に戀をしてゐた。けれども定められた運命だから如何することも出来ない。奴は苦しんだ、而してその苦しみと無限の淋しみを、幾枚もの畫に描き上げた。風景や靜物にも素晴らしいのはあるが、その女の肖像畫に至つては神品だといふより外に言葉がない。

瀬古——おい／＼それは誰の事だい。ともちやん、お前覺えがある。

花田——まあ、あとでわかるから黙つて聞け、……ところで、奴が死んで見ると、俺れ達彼れの仲間は、奴の作品を最も正しい方法で後世に遺す義務を感じるのだ。ところで、俺れは九頭龍にいつた。苟もお前さんが押しも押されもしない書畫屋さんである以上、書畫屋といふ商賣にふさはしい見識を見せるのが、お前さんの譽れにもなるし沽券にもなる。一つお前さんあれを一手に引受けて遺作展覽會をやる氣はありませんか。さうしたら、九頭龍の野郎、それは耳よりなお話ですから、私も一つ損得を捨て、乗らないものでもありませんが、それ程先生方がお讚めになるもんなら、展覽會の案内書に先生方から一言づゝでもお言葉を頂戴す

ることしたらどんなものでせうといやがつた。

瀬古——僕はいやだよ、そんなのは。僕等の藝術に先生方の裏書きをして貰ふ位なら、僕は野末でのたれ死をして見せる。

とも子——えらいわ若様。

瀬古——ひやかすなよ。

花田——全くだ。第一俺れ達のやうな頸骨の固い謀叛人に對して、大家先生達が裏書きどころか、俺れ達と先生方と何のかゝはりあらんやだ。……ところで俺れはいつた。そんなら、こちらでお断りする外はない。奴の畫はそんなけちな畫ではない。大手をふつて一人で通つて行く畫だ。さういふものを發見するのが書畫屋の見識といふものではないか。さういふ見識から儲けが生れて來なければ、大きな儲けは生れはしない。

澤本——俗物の本音を出したな。

花田——俺れがそんなことでもして大きな儲けをしたら俗物とでも何んともいふが。融通のきかないのをいゝ事にして仙人ぶつてるお前達とは少し違ふんだから。……ところで九頭龍が大分頭を縦にかしげ始めた。まあ來て御覽なさいといつたら、それではすぐ上ります

といつた。……ところで、これからが本當の計略になるんだが、……おい皆んな嚴肅な氣持ちで俺れのいふことを聞け。お前達の中誰でも、この場に死んだとして、今まで描いたものを後世に遺して恥ぢないだけの自信があるか。どうだ。生蕃どうだ。

澤本——無くつてどうする。

花田——よし。瀬古はどうだ。

瀬古——僕は恥ぢる恥ぢないで畫を描いてるんぢやないよ。僕は描きたいから描くんだ。

花田——わかつた。ぢやその氣持ちは純粹だな。

瀬古——今更そんなことを……水くさい男だなあ。

花田——ドモ又はどうだ。

戸部——出來たものは皆んないやだ。けれども人のに比べれば、俺れのゝ方がいゝと俺れは思つてゐる。俺れはそれを知つてゐる。

花田——青島の心持ちはもう聞いた。青島も俺れも、自分の仕事を後世に残して恥しいとは思はない。俺れ達は皆んな謂はゞ子供だ。けれども子供がいつでも大人の家來ぢやないからな。

一同——さうだと。

花田——ぢやいゝか。俺れ達五人の中一人はこの場合死なゝけやならないんだ。あとの四人が晝を描きつゞけて行く費用を造り出すために犠牲となつて俺れ達のグループから消え去らなければならぬんだ。

瀬古——おい／＼花田、お前氣でも違つたのか。僕達は藝術家だよ。殉教者ぢやないよ。

花田——藝術の爲めに殉死するのさ。その位の意氣があつてもいゝだらう。その代り死んだ奴の晝は九頭龍の手で後世まで残るんだ。

澤本——何といふ智慧のない計略を貴様は考へ出したもんだ。そんなことを考へ出した奴は自分が先きに死ぬがいゝんだ。

花田——俺れが死んでいゝかい。……さうだもう一ついふことを忘れてゐたが、死ぬ番にあつた奴は、その褒美としてともちやんを奥さんに出ることが出来るんだ。この大事な条件をいふのを忘れてゐた。おいともちやん……ドモ又、もう描くのをやめろよ……ともちやん、お前頼むから俺れ達五人の中の誰でもいゝ、お前の氣に入つた人と本當に結婚してくれないか。

とも子——何んですねえ途轍もない。

花田——俺れ達五人の中に一人、お前の旦那にしてもいゝと思ふのがゐるつてお前いつかのろけてゐたぢやないか。

とも子——そりや……そりやゐないこともないことよ。

花田——待てよ。「ゐないこともないことよ」といふのは結局、ゐるといふことだね。

とも子——知らないわ。

花田——女が「知らないわ」といつたら、もうしめたもんだ。お前が一人選んだら、俺れ達あとに残された四人は、奇麗に未練を捨てゝ、二人が一緒になれるやうに、極力奔走する。成功させるために屹度盡力する。だからお前、本氣になつてこの五人の中から選ぶんだ。そこに行く俺れ達ボヘミヤンは自由なものだ。ともちやんだつて俺れ達の仲間になつてくれる以上はボヘミヤンだ。ねえ。さうだらう。構はないから選び給へ。俺れ達は縦令選にもれても、ストイックのやうに忍ぶから……心配せずに。俺れ達の方にはともちやんを細君に持つのに反對する奴は一人もゐない。どうだ皆んないゝか。よければ「よし」といへ。

一同——よし。

とも子——選んだらどうするの。

花田——そいつが残る四人の爲めに死ななければならぬんだ。

とも子——冗談もいゝ加減にするものよ。人を馬鹿にして。(涙ぐむ)

花田——なあに、冗談ぢやないさ。わけはない、ころつと死にさへすりやいゝんだよ。

戸部——花田、貴様は残酷な奴だ。……ともちやんをすぐ寡婦にする……そんな……貴様。

花田——(初めて思ひついたやうに堪らない程笑ふ) 何んだ、貴様達はともちやんのハスが本當に……

瀬古——死ななければならぬんだらう。

花田——死ぬことになるんださ。

瀬古——同じぢやないか。

花田——同じぢやないさ。

青島——花田のいひ方が悪いんだよ。死ぬことになるんぢやない、つまり死んだことにするんだよ。わかつたらう。つまり死ぬんぢやない、死んでしまうこと……でもないかな。

花田——つまり、かうだ。いゝか、頭を冷靜にしてよく聞け。いゝか。ともちやんに選ばれた奴は實はその選ばれた奴の弟なんだ。いゝか。而してともちやんとその弟とは前から夫婦な

んだ。ともちやんは、俺れ達に理解と同情とを持つてゐて、モデルも備へない程貧乏な俺れ達のためにモデルになつてくれたのだ。いゝか。ところでともちやんのハスの兄貴にあたるのが、本當は俺れ達五人の仲間の一人で、それがともちやんに戀をして、貧乏と戀との爲めに業半ばにして死ぬことになるんだ。今度はわかつたらう。……まだ解らないのか……濟度しがたい奴だなあ。ぢや青島、實物でやつて見せるより仕方がない、あれを持ち込まう。

花田と青島、黒布に被はれたる寢棺を擔ぎこむ。

とも子——いや……縁喜の悪い……

澤本——全く貴様はどうかしやしなないか。

花田——さあ、ともちやん、俺れ達の中から一人選んでくれ。俺れが引受けた、お前の旦那は決して死なしはしないから。

とも子——だつてそんな寢棺を持ち込む以上は……

花田——死骸になつてこゝに這入る奴はこれだ。(といひながら、壁にかけられた石膏面を指す。) こいつに繪具を塗つてお前の選んだ男の代りに入れゝばいゝんだよ。例へば俺れがお前に選ばれたとするね。本當にさうありたいことだが。すると俺れは俺れの弟となつてお前と

夫婦になるんだ。而してこいつ（石膏面）が俺れの身代りになつてこの棺の中にはいるんだ。とも子——は、あ……少し解つて来てよ。

花田——わかつたかい。天才畫家の花田は死んでしまふんだ。本當にもうこの世の中にはゐなくなつてしまふんだ。その代り花田の弟といふのがひよつこり出来上るんだ。それが俺れさ。而してお前のハスさ。

とも子——は、あ……大分解つて来てよ。

花田——な。そこに大俗物の九頭龍と、頭の悪い美術好きの成金堂脇左門とが、娘でも連れてはいつて来る。花田の弟になり切つた俺れがお前と一緒にこゝにゐて愁歎場を見せるといふ仕組みなんだ。どうだ仙人共もわかつたか。花田の弟になる俺れは生きて行くが、花田の兄貴なる本當の花田は死んだことにするんだ。ぢやない死ぬことになるんだ。現在死なねばならないんだ。それだから俺れは始めから死ぬんだといつて聞かせてゐるのに、貴様達はまるで木偶の坊見たいだからなあ。……ところで俺れの弟は、兄貴の志をついで天才畫家になるとしても、兎に角俺れが死なねばならぬといふのは悲壯な事實だよ。死にさへすれば、殊に若死さへすれば、大抵の奴は天才になるに決つてゐるんだ。（石膏面を眺めながら）死は

如何なる場合に於ても、嚴かな悲しいもんだ。だからかゝる犠牲を拂ふからには、俺れがともちやんのハスとして選ばれる位のことが必要になるんだ。

とも子——何にもあなたなんかまだ選びはしないことよ。

花田——さうつけくやり込めるものぢやないよ、女つてもものは。

澤本——俺れはもう駄目だ。俺れは或る女を戀してゐた。而して飢ゑが逼つて来た、あゝ俺れは死んだ方がいゝ。俺れは天才畫家として畫筆を握つたまゝ死にたいよ。

とも子——花田さん、私、死ぬ人を旦那さんにするんぢやないのね。私の旦那さんが死ぬことにたるのでせう。

澤本——さうつけくやり込めるものぢやないよ、女つてもものは。

花田——皆んな俺れの計略が解つたな。俺れ達は今俺れ達の共同の敵なるフィリスティンと戦はねばならぬ時が来た。青島、お前と堂脇との遭遇戦についても簡單に報告しろよ。

青島——僕はかまはず堂脇の家の広い庭にはいりこんで畫を描いてみてやつた。さうしたら堂脇がお嬢さんを連れて散歩にやつて来た。堂脇はこんな風に歩いて、お嬢さんはこんな風に歩いて。而して俺れの脇に突立つて畫を描くのをぢつと見てゐたつけが、庭にはいりこんだ

のを怒ると思ひの外、ふんと感心したやうな鼻息を漏らした。お嬢さんまでが「まあ奇麗なこと」と御意遊ばした。僕はしめたと思つて、物をいひ出すつき穂に苦心したが、あんな海千山千の動物には俺れの言葉はとてわからないと思つて黙つてゐた。全くあんな怪物の前に行くとは薄味味の悪いもんだね。さうしたら堂脇が案外やさしい聲で「失禮ながらどちらで御勉強です、大層お見事だが」ときり出した。僕は花田に教へられたとほり、自分の賢んか何んでもないが、昨日死んだ仲間の霊は實に大したものだ、若しそれが世間に出たら、一世を驚かすだらうと、一生懸命になつて吹聴したんだ。いかもの食ひの名人だけあつて堂脇の奴すぐ乗り氣になつた。僕は九頭龍の主人が来て見ることになつてゐるから、何んなら連れ立つておいでなさいといつて飛び出して来た。何しろお嬢さんがちか／＼動物電氣を送るんで、僕はとても長くゐたゝまれなかつた。どうして最も美を憧憬する僕達の世界には、ナチュール・モルトの外に美がよりつかないんだらうかなあ。

瀬古——どうかしてそのお嬢さんを描かうぢやないか。

青島——あの人モデルになつてくれれば僕はモナ・リザ以上のものを描いて見せるよ、峠度。

瀬古——僕はアットーの精神でそのデカダンの美を見きはめてやる。

青島——見もしないで何をいふんだい。

瀬古——君は藝術家の想像力を……

花田——報告終り。事務第一。さ、皆んな覺悟はいゝか。ともちゃん、さあ選んでくれ。

とも子——私……恥しいわ。

瀬古——お前の無邪氣さでやつちまい給へ。何、一言、誰つていつてしまへば、それだけのことだよ。

とも子——ぢや一生懸命で勇氣を出して……けど、私がこれつていつた人は、いやだなんていはないで頂戴ね。でない、私本當に自殺してよ。

花田——誓ひを立てたんだから皆んな大丈夫だ。

瀬古は自信をもつて歩きまはる。花田は重いものを度々落して自分の方に注意を促がす。

澤本は苦痛の表情を強めて同情を牽く。青島はとも子の前に坐つてぢつとその顔を見ようとする。戸部は畫箱の掃除をはじめめる。

とも子——（人々から顔をそむけ）では始めてよ。……花田さん、あなたは才覺があつて畫がお上手だから、いまに立派な畫の會を作つて、その會長さんにでもおなりなさるわ。お嫁に

してもらひたいつて、學問の出来る美しい方が掃いて捨てる程集つて来てよ屹度。澤本さんは男らしい、正直な生番さんね。あなたとは随分口喧嘩をしました。奥さんが出来たら随分可愛がるでせうね、而してお子さんも澤山出来るわ。而して物干竿におしめが賑やかにならびますわ。青島さんは花田さんと一緒に會をやつて、屹度偉くなるわ。いまに皆んながあなたの畫を認めて大騒ぎする時が来てよ。而して堂脇さんとやらが、美しいお嬢さんを買つて下さいつて、先方から頭を下げて来るかも知れないわ。けれどもあんまり浮氣をしちやいけなくつてよ。瀬古さん……あなたは若様ね。きさくで親切で、所付きだつて一番上品で綺麗だし、お友達にはうつつけた方ね。でもあなた、屹度日本なんかいやだつて外國にでも行つちきうんでせう。お大事にお暮下さい。戸部さんは吃りで、棚齋持ちで、氣わづかしやね。いつまでたつてもあなたの畫は買れさうもないことね。けれどもあなたは強がりなくせに變に淋しい方ね……

戸部——畜生……

とも子——悪口になつたら、許して頂戴。でも私は心から皆さんにお禮しますわ。私見たいながらくした物のわからない人間を、皆さんで可愛がつて下さつたんですもの。お金にはち

つともならなかつたけれども、私、何所に行くよりも、こゝに来るのが一番嬉しかつたの。ともどもに苦勞しながら、銘々が一番偉らいつもりで、仲よく勉強してゐるのを見てゐると、何んだか知らないが、私時々涙がこぼれつちまひましたわ。……でも私、自分の旦那さんを極めなければならぬんだわ。いやになるねえ。私がいゝ人を選んで、どうか怒らないで頂戴よ。私、これでも身の程をわきまへて選ぶつもりですから……（急に戸部の前にかけて寄り、びつたりそこに坐り頭を下げる）戸部さん、私あなたのお内儀さんになります。怒らないで頂戴よ。私あなたのことと思ふと、變に悲しくなつて、泣いちゃうんですもの……

戸部——君……冗談をいふない、冗談を……

花田——ともちゃん、出来したぞ。全くお前に似合はしい選び方だ。だがドモ又におはちが廻らうとは俺れも實は今の今まで思はなかつたよ。ともちゃんが戸部一人のものになつて明日から來なくなると思ふと、急に俺れ達の上には秋が來たやうだなあ……然しもう何もいふな。皆んなもう何もいふな。勇ましく運命に黙従する外はない。而して戸部ともちゃんとの未來を祝福しようぢやないか。

戸部——俺れはともちゃんをなぐつたことがある。

とも子——ええ、たしかに二度なぐられてよ。

戸部——それでも、俺れのところに来る氣か。

とも子——行きます。その代り、今度こそはなぐられてばかりはゐないわ。

瀬古——夫婦喧嘩の仲裁なら僕がしてやるよ。

戸部——餘計な世話だ。

とも子——(同時に) 餘計なお世話よ。

青島——氣が強くなつたなあ。

花田——それどころぢやない。もうおつゞけ九頭龍等がやつて来る。おい若夫婦、お前達は今日は花形だから忙しいぞ。ともちゃん……ぢやない、奥さんは庭にお出なすつて、お兄さんの棺を飾る花をお集め下さいませんか。ドモ又、お前が描いた畫といふ畫は何んでもかんでも持ち出してサインをしろ。而して青島、お前一つこの石膏面に繪具を塗つてドモ又の死顔らしくしてくれ。それから澤本と瀬古とは部屋を片付けて……但し畫室らしく片付けろよ。藝術家の尊嚴を失ふ程きちんと片付けちや駄目だよ。美的にそこいらを散らかすのを忘れちやいかんぜ。そこで俺れはと……俺れはドモ又をドモ又の弟に仕立て上げる役目にまはるか

ら……お前の畫は大抵隣りの部屋にあるんだらう。これはお前んだ。これもく皆んな持つて行かう。

とも子は庭に、戸部と花田別室に入り去る。

青島——こんなアポロの面にいくら繪具をなすりつけたつて、ドモ又の顔にはなりやしないや。もう少し獅子鼻でできぼくのある……まあこれだな、ペトーゴンで間に合はせるんだな。

青島塗りはじめる。

澤本——あゝ俺れはもう駄目だ。昂奮が過ぎ去つたら急に又腹がへつて来た。一體花田の奴餘計なことをしやがる奴だ。……あの可憐な自然兒ともちゃんも、人妻なんていふ人間じみたものに……あゝ、俺れはもう駄目だ。若様、昔様勝手に掃除しろ。

瀬古——僕もすつかり悲觀したよ。もとはつていへば青島が悪いんだ。堂脇のお嬢さんのモデル事件さへ無ければ、運命はもつと正しい道筋を歩いてゐたんだ。

青島——僕が悪いんぢやない、堂脇のお嬢さんが存在してゐたのが悪いんだ。お嬢さんの存在が悪いんぢやない。その存在を可能ならしめた堂脇のぢよいの存在してゐたのが悪いんだ。つまり堂脇のぢよいが俺達の運命をすつかり狂はしてしまつたんだよ……どうだ少しドモ又

に似て来たか……仙人の運命を狂はした罪科に對して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。
 澤本——さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を濁茶苦茶にする爲めに使はれてゐたんだ。
 その爲めに俺れ達は三度のものも食へない程飢えてしまふんだ。ドモ又が死んで色づけのベ
 トーエンになる結果に陥つたんだ。ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけりや、
 俺れ達の腹の蟲は納らないや。

瀬古——而してそれが結局堂脇や九頭龍を教育することになるんだからなあ。いくら高く買は
 せたつてドモ又の畫は高くはないよ。今度あいつらは生れてはじめて畫といふものを拜むん
 だ。うんと高く賣りつけてやるんだなあ。

澤本——さうすると、俺れ達はうんと飯を食つて底力を養ふことが出来るぞ。

青島——さうだ。

澤本——あゝ早く我等の共同の敵たるフィリスティン共が來るといふたあ。おい若様、少し働か
 う。

二人であらかた畫室を片付ける。花田と戸部とがはいつて來る。戸部は頭を虎斑に刺りこ
 まれて髭を剃り落されてゐる。

花田——諸君、ドモ又の戸部が死んだについて、その令弟が急を聞いて尋ねて來られたんだ。
 諸君に紹介します。

一同笑ひながら頭を下げる。

戸部——俺れ……ぢやない、俺れの兄貴の死顔を一寸見せてくれ。

青島——どうだこれで。(石膏面を見せる)

戸部——俺れの兄貴は醜男だつたなあ。

花田——醜男はいゝが髭が生えてゐないぢやないか。近所の人が悔みに來るとまづいから、剃
 り落した髭を植ゑてやらう。それから體の方も造らなきや……この棺を隣りに持つていつて
 ……おいドモ又の弟、お前そこで残つたのにサインをしろ。

戸部を残し一同退場。戸部しきりとサインをしてゐる。とも子花を持ちて入場。

とも子——(戸部とは氣がつかず次ぎの部屋に行かうとする)あゝ、御免下さいまし……。

戸部——ともちゃん……俺れだ……俺れだ……

とも子——あら……あなた戸部さんぢやなくなつて。

戸部——俺れは君のハスで……戸部の弟だよ。

とも子——あらさうだわ。まあそれに違ひないわ。戸部さんの弟つて、戸部さんより若い方ねえ。

戸部——ともちゃん……俺れは君に遇つた時から……君が好きだつた。けれども俺れは、女ながらに縁はないと思つて……諦めてみたんだが……

とも子——御免なさいよ。私、はじめてこゝに來た時、あんたなんて黙りこくつた醜男な人、ゐるんだかゝないんだかわからなかつたんですけど、だんく、だんだあん好きになつて來てしまひましたわ。花田さんが私の旦那さんに誰れでも選んでいゝつていつた時は、本當は随分嬉しかつたけれど、あなたは屹度私が嫌ひなんだと思つて随分心配したわ。

戸部——何しろ俺れは幸福だ……俺れは自分の藝術の外には、もう何にも望みはないよ。……俺れはもう君をなぐらないよ。

とも子——嬉しさに涙ぐみつゝ、なぐつてもいゝことよ。いゝから私を可愛がつて下さいね。私も一生懸命であなたを可愛がりますわ。あなたは寶の珠のやうに、可愛がれば可愛がる程光りが出て來る人だつてことを、私ちやんと知つてゝよ。あなたは泥だらけな寶の珠だわ。

戸部——俺れは口がきけないから……思つたことがいへない……

とも子の手を取つて引寄せようとする。澤本突然戸を開けて登場。

澤本——おうい、ドモ又……と、あの、貴様のその上衣をよこせ、貴様の兄貴に着せるんだから。その代りこれを着ろ……ともちゃん花が取れたかい。それか。それをおくれ、棺を飾るんだから……

澤本退場。……戸部とも子寄り添はんとす。別室にて哄笑の聲。二人口惜しさうに離れたところに坐る。

とも子——今夜歸つたら、私すぐお母さんにさういつて、いやでも應でも承知させますわ。で、今度のあなたの名前は……

戸部——俺れは何といふ名前にするかな……

とも子——いゝわ、私の名を上げるから戸部友又ちやいけな……それぢやをかしいわね。あのね……あなた又畫かきになるんでせう……

とも子近づかうとする。瀬古登場。

瀬古——ちよつとく。こゝにお前の畫がまだ残つてゐたから……

戸部——うるさい奴だなあ……

瀬古退場。別室にて哄笑の聲。やがて一同飾りを終つて棺をかついで登場。

花田——早く／＼……もうやつて来るぞ。棺のこつちにこの椅子をおいて……これをこゝに、おい青島……それをそつちにやつてくれ……おい皆んな手傳へな……一時間の後には俺れ達はしこたま御馳走が食へる身分になるんだ。生蕃、そんな及び腰をするなよ、みつともない。……これで大體いゝ……さあ皆んな舞臺よきところに坐れ。若夫婦はその椅子だ。何しろ俺れ達は、一人の大事な友人を犠牲に供して飯を食はねばならぬ悲境にあるんだ。ドモ又は俺れ達五人の仲間から消えて無くなるんだ。ドモ又の弟はその細君のともちやんと旅の空に出かけることになるだらう。俺れ達のやうに良心を以て眞剣に働く人間がこんな大きな損失を忍ばねばならないといふのは世にも悲惨なことだ。然し俺れ達は自分の愛護する藝術の爲めに最後まで戦はねばならない。俺れ達の主張を成就するためには手段を選んではゐられなくなつたんだ。俺れ達はこの棺の中に死んで横はるドモ又の靈にかけて誓ひを立てよう。俺れ達はこの友人の死に値ひするだけの立派な藝術を生み出すことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者の

金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせることを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——その爲めには日頃の馬鹿正直を抛つて、巧みに權謀術數を用ゆることを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——但し尻尾を出しさうな奴は黙つて引込んでゐる方がいゝぜ。それでは俺れ達四人は戸部ともちやんと最後の告別をしようぢやないか。……戸部、お前のこれまでの藝術は、若くして死んだ天才戸部の藝術として世に残るだらう。然しそこでお前の生活が中断するのを俺れ達はすまなく思ふ。然しその償ひにともちやんを得た以上、不平をいはないでくれ。な。而してお前は新たに戸部の弟として新生面を開いてくれ。俺れ達はそれを待つてゐるから。ぢやさよなら。

一同交る／＼握手する。

花田——ともちやん、お前は俺れ達の方だつた。慰めだつた。お母さんだつた。可愛い、娘だつた。お前と別れるのは俺れ達全くつらいや。だからお前の額に一度だけ皆んなで接吻するのを許しておくれ。なあ戸部いゝだらう。

戸部——よし、一度限り許してやる。

花田——ともちやんさよなら。(額に接吻する)

とも子——さよなら花田さん。

澤本——俺れはまあやめとく。握手だけしとく。

とも子——さよなら生蕃さん。

青島——さよなら。(額に接吻する)

とも子——お大事に浮気屋さん。

瀬古——脣をよくお見せ、あゝあ。(額に接吻する)

とも子——さよなら可愛い、若様。

とも子さすがに感情せまつて泣き出す。

花田——よし。それからドモ又の弟にいふが、不精をしてゐると、頭の毛と髭とが延びて来て、

ドモ又にあと戻りする恐れがあるから、今後決して不精髭を生やさないことにしてくれ。

とも子——そんなこと、私がさせときませんわ。

戸外にて戸をたたく音聞こゆ。

人の聲——え、御免下さいまし、九頭龍で御座いますが、花田さんはおいでよ御座いませうか。

他の人の聲——私は堂脇ですが……

花田——そら來やがつた。……皆んない、か大丈夫か……俺れ達は非常な不幸に遇つたんだぞ。

悲しみのどん底にゐるんだぞ。此際笑ひでもした奴は敵に内通した謀叛人として皆んなで制

裁するからさう思へ。九頭龍も堂脇も……今開けます、一寸待つて下さい……九頭龍も堂脇

もたまらない俗物だが、政略上向腹を立て、事をし損じな、やうに皆んな誓へ。

一同——誓ふ。

花田——泣ける奴は時々涙をこぼすやうにしろ、いゝか……ぢや開けるぞ。

澤本——花田、ちよつと待て……(茶碗に二杯水を入れて戸部の所に持つて行く)おいドモ又、

貴様の涙をこの中に入れとくぞ。これはともちやんのだ。尻の後ろにやつとけ。慌て、こぼすな。

花田——しいつ(観客の方に向いて笑ふのを制する)ぢや開けるぞ。皆んなしかめつ面をしてろ。

とも子はさつきから本當に泣いてゐる。戸部茶碗から水をすくつて眼のふちに塗る。花田

戸を開けに行く。

(これはマーク・トワエインの小話から暗示を得て書いたものだ)

(一九二二・十月「泉」所掲)

—了—

—幕—



大正十三年六月五日印刷
大正十三年六月十日發行

(價五拾五錢)

著 作 者

有 島 武 郎

發 行 者

東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地
佐 藤 義 亮

發 行 所

新 潮 社

東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地

電 話 牛 込
八 八 八 八
〇 〇 〇 〇
九 八 七 六
番 番 番 番

番 二 四 七 一 (京 東) 替 振

印 刷 所

東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町
電 話 小 石 川 五 九 二 番

富 士 印 刷 株 式 會 社

印 刷 者 佐 々 木 俊 一

有島武郎著作集 (各編増版出来)

■(1) 死

少女の死を描いて満眼の涙、よく其透明の觀察を妨げざる『お末の死』、人生最高の意に觸れたる傑作『死』其前後、及び『平凡人の手紙』等、死を題材とせるものを収む。

■(2) 宣言

悲愴なる戀の物語也。高潔なる精神と燃ゆるが如き情熱を有する一青年が身にも換へて愛する約姫の少女は如何にして其の友の手に委せるかの徑路を描いて沈痛を極む。

■(3) カインの末裔

作者の手腕を文壇の一般に認めしめたる最初の作にして其の全作中の一面を代表せる傑作。外に『實験室』『凱旋』『クラ』の出家』等何れも作者の特色豊かなるものを集む。

■(4) 叛逆者

近代的生活の創始者にして人生の未來に對して暗示深き教訓を與へたる藝術家ロマン・ミレー、ホイットマンの三氏に就き、憧憬讚美の心を寄せたる著者独自の感想文也。

■(5) 迷路

異境に放浪して、肉の呻きと靈の端ぎとに悶ゆる一青年を主人公となし、妖艶淫蕩なる一夫八枚に亘れる生活の曲折を配して沈痛華麗なる二百四十枚に亘れる長篇小説也。(定價壹圓、送料六錢)

一冊十八錢 送料六錢

感想小品叢書

文壇諸家の主張と其生活ぶりを窺はしむ可き隨筆集。感想あり小品あり批評あり旅行記あり人物論あり。興味豊かなる絶好讀みものとして歡迎せらる。

(1) 我が文藝陣 菊池 寛氏著

(2) 泉のほとり 正宗白鳥氏著

(3) 微笑笑藝術 久米正雄氏著

(4) 七寶の柱 泉 鏡花氏著

(5) 草 武者小路實篤氏著

(6) 白醉亭漫記 里見 淳氏著

(7) 文學的散步 宇野浩二氏著

一冊壹圓廿錢 送料八錢

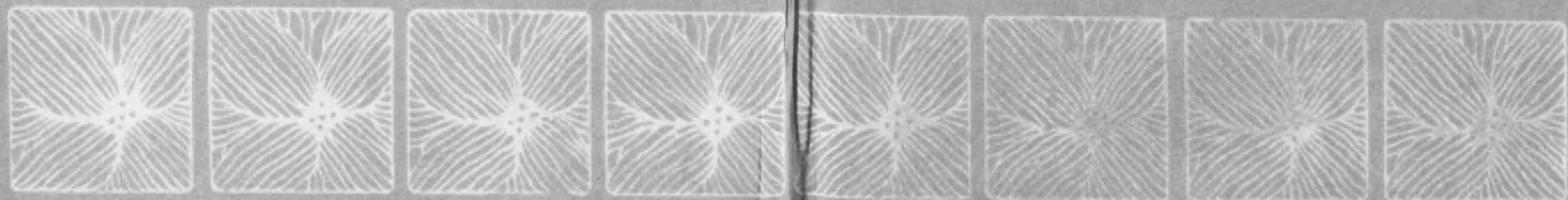
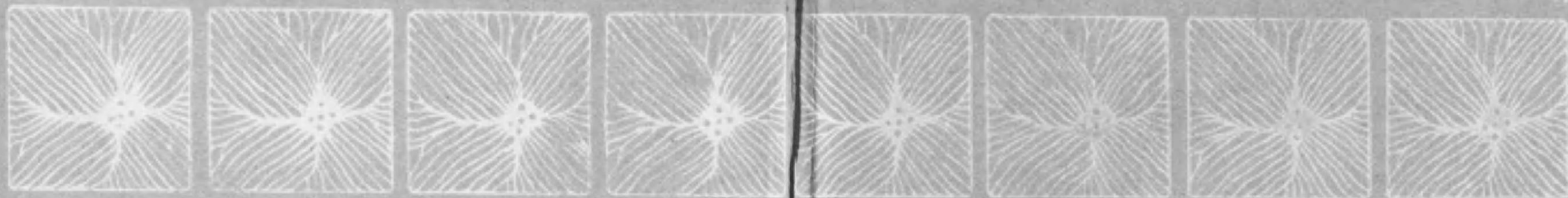
◀ 集 全 作 傑 正 大 治 明 ▶

的代表

名 作 選 集

羽二重表紙
一册五拾五錢
透料一册六錢

第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩	第十三 耽	溺泡鳴	廿五 物言はぬ顔 未明
第二 坊つちやん 漱石	第十四 明治詩歌選 六家	廿七 體の皮 小劍	廿六 ふところ日記 眉山
第三 蒲 團花袋	第十五 戀 さめ 風葉	廿八 女 役者 俊子	
第四 透谷選集 透谷	第十六 別れた妻 秋江	廿九 南小泉村 青果	
第五 春 (上) 藤村	第十七 はつ 姿 天外	三十 少年 行 星湖	
第六 春 (下) 藤村	第十八 お艶殺し 酒二郎	卅一 啄木選集 啄木	
第七 たけくらの記 榎牛	第十九 俳 諧 師 虚子	卅二 運命の丘 抱月	
第八 爛 れ 秋聲	二十 煤 煙 (上) 草平	卅三 和 解 直哉	
第九 平 凡 四迷	廿一 煤 煙 (下) 草平	卅四 末 枯 万太郎	
第十 高 野 聖 鏡花	廿二 子規 花 枕 子規	卅五 善 心 惡 心里見 驛	
第十一 何 處 へ 白鳥	廿三 そ の 妹 實篤	卅六 俊 寬 菊池 寬	
第十二 今 戸 心 中 柳浪	廿四 旅 役 者 幹彦	卅七 將 軍 龍之介	
	廿八 涓	滴 鷗 外	



終